

富山県 大島町

八 塚 C 遺 跡

—民間分譲宅地造成事業に伴う発掘調査報告（2）—

2000年3月

大島町教育委員会

序

八塚C遺跡は、民間宅地造成事業に先立ち、大島町教育委員会が平成9・10年度の2ヶ年にわたり、発掘調査を実施しました。

平成9年度の調査では、中世の掘立柱建物や井戸などの遺構が見つかり、遺物では火舎や懸仏などが出土しました。

今回の調査では、溝によって区画された中世の掘立柱建物群が発見され、その区画溝のひとつから「愛染坊常住」という墨書のある折敷が出土しています。戦国時代、この地に山伏の住む寺があった、という伝承が町史で取り上げられており、これらとの関連についても注目されています。

本書は、その調査結果をまとめたものであり、出土品と併せて、地域の歴史の解明や今後の調査研究に役立てていただければ幸いです。

終わりに、調査に対しての御理解ならびに御協力頂きました株式会社高岡地所・地元住民の方々及び、富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係機関の方々に厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

大島町教育委員会

教育長 亀谷慶英

例　　言

- 1 本書は民間分譲宅地造成事業に先立ち実施した、富山県射水郡大島町八塚地内に所在する八塚C遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、株式会社高岡地所に委託を受けて、大島町教育委員会が実施した。調査にあたっては富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受け、指導と協力を得た。
- 3 調査事務局は大島町教育委員会事務局生涯学習係に置き、学芸員 田中 明が調査事務を担当し、事務局長竹内三和が総括した。
- 4 調査期間・面積・調査体制は以下のとおりである。

調査期間 平成10年4月22日～同年11月6日 (延べ100日間)

調査面積 6,500m²

| | | | | |
|-------|--------------|-------|-----|-------|
| 調査担当者 | 大島町教育委員会 | 生涯学習係 | 学芸員 | 田中 明 |
| | 同 | 上 | 調査員 | 大友喜代子 |
| | 富山県埋蔵文化財センター | 調査課 | 課長 | 宮田 進一 |
| | 同 | 上 | 主任 | 島田 修一 |

なお、調査期間中、図面作成等の作業において、富山県埋蔵文化財センター 調査課主任 神保孝造・同 文化財保護主事 境洋子両氏の協力を得た。

- 5 本書の作成にあたって、編集は主として大友・島田があたり、執筆は調査担当者が分担して行った。個々の文責は文末に記したとおりである。
- 6 現地調査ならびに資料整理にあたって下記の方々から御協力を頂いた。記して謝意を表したい。
安念幹倫・岩田隆・宇野隆夫・越前慶祐・垣内光次郎・岸本雅敏・京田良志・金龍教英・久々忠義・酒井重洋・高梨清志・棚元理…・西井龍儀・長谷川益男・前川要・南洋一郎(五十音順、敬称略)
高瀬直子・畠山りえ子(整理作業員)
- 7 現地調査にあたっては、大島町シルバーパートナーズ・新湊市シルバーパートナーズの協力を得た。また株式会社高岡地所、イカリ建工株式会社から作業員、調査事務所、重機、調査器材等について多大な御協力を頂いた。記して厚く御礼申し上げる。
- 8 本書の挿図・写真図版に用いた方位は磁北、標高は海拔高である。なお遺構の表記にあたっては略号を用いた。使用した略号は以下のとおりである。
S B : 捨立柱建物、S A : 標、S K : 上坑、S D : 溝・河川、S E : 井戸、S X : 不明遺構、P : 柱穴
- 9 本書で使用した土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』に基づくものである。
- 10 出土品ならびに記録資料は大島町教育委員会が保管している。

本文目次

序

例 言

目 次

| | | | |
|--------------|----|----------|----|
| I 遺跡の位置と環境 | 1 | IV まとめ | |
| II 調査の経緯 | 2 | 1 遺構と遺物 | 35 |
| III 調査の概要 | | 2 全体のまとめ | 38 |
| 1 調査区の位置と区割り | 2 | 引用・参考文献 | 40 |
| 2 調査の方法と経過 | 4 | | |
| 3 層序 | 4 | | |
| 4 遺構 | 5 | | |
| 5 遺物 | 21 | | |

挿図目次

| | | | | | |
|------|-------------|----|------|----------------|----|
| 第1図 | 遺跡の位置と周辺の遺跡 | 1 | 第15図 | 遺物実測図 | 26 |
| 第2図 | 調査区の位置と区割図 | 3 | 第16図 | 遺物実測図 | 27 |
| 第3図 | 基本層序模式図 | 4 | 第17図 | 遺物実測図 | 28 |
| 第4図 | 遺構配置図 | 9 | 第18図 | 遺物実測図 | 29 |
| 第5図 | 遺構配置図 | 11 | 第19図 | 遺物実測図 | 30 |
| 第6図 | 遺構実測図 | 13 | 第20図 | 遺物実測図 | 31 |
| 第7図 | 遺構実測図 | 14 | 第21図 | 遺物実測図 | 32 |
| 第8図 | 遺構実測図 | 15 | 第22図 | 遺物実測図 | 33 |
| 第9図 | 遺構実測図 | 16 | 第23図 | 遺物実測図 | 34 |
| 第10図 | 遺構実測図 | 17 | 第24図 | 八塚C遺跡の遺構変遷図 | 38 |
| 第11図 | 遺構実測図 | 18 | 表1 | 八塚C遺跡の土器・陶磁器組成 | 37 |
| 第12図 | 遺構実測図 | 19 | 表2 | 八塚C遺跡出土の銭貨一覧 | 39 |
| 第13図 | 遺構実測図 | 20 | | 写真図版 | |
| 第14図 | 土師器皿分類図 | 21 | | | |

I 遺跡の位置と環境

大島町は富山県の西部域に位置し、庄川の右岸に広がる沖積低地である射水平野にその町域を形成する。東は小杉町に接し、西は庄川に沿って高岡市に相対し、北は新湊市、南は大門町にそれぞれ隣接している。この沖積低地は約6,000年前（縄文時代前期）には、今は富山新港となっている放生津潟が射水丘陵の山際まで広がる湖底であった。その後気候の寒冷化に伴い、和田川・神楽川・下条川・鐵治川などの諸河川によって土砂が運ばれ、それが堆積して次第に陸地化し、あちこちに沼地が残る湿地帯となっていました。現在の大島町は全体に平坦な土地が広がり、標高は高いところで約8m、低いところで約3mを測る。

八塚C遺跡は大島町八塚地内、大島町南西部の大門町との境に接したところに所在する。標高7m前後に立地する中世後期（15～16世紀）の集落遺跡である。調査区付近の小字名は「中寺家」、「東寺家」、「表熊屋敷」と呼ばれ、町史には「昔、ここに山伏の住む大きな寺があった。上杉謙信の兵火で焼失した」という伝承が残っていることが記されている（大島町教育委員会 1989）。さらに、八塚地内の東部域では、古代・中世の集落の存在を裏付ける土師



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

器（杯・高杯・壺など）や須恵器（壺・甕）、珠洲などが発見されている。

また、周辺地域に目を転ずれば、本遺跡の立地する平野部や、射水丘陵をはじめとする丘陵地は、第1図に示したとおり遺跡の密集地となっており、特に平野部では、弥生時代から中世の遺跡が主体をなしている。なかでも大島町域では、新湊市高木と大島町北高木にまたがり、縄文時代（後期～晩期）・弥生時代（中期～後期）・古代・中世に及ぶ複合遺跡である高木・荒畠遺跡や、この遺跡と一緒に、大量の墨書き土器をはじめ出拳制度に関わる記載が認められる木簡、版木状木製品（奈良・平安時代）や、鋳造遺構・鋳型（中世後期）などが発見され注目を集めた北高木遺跡、近世の北陸道の姿を残していた水上・本開発遺跡や、町道建設に先立つ発掘調査が進められていた小林遺跡（弥生時代～近世）などが広く知られている。

（大友）

II 調査の経緯

平成7年8月に、大島町教育委員会は民間の不動産業者から、分譲住宅団地造成を目的とした大島町八塚地内の農振農用地からの除外申請を提出する際にして、埋蔵文化財包蔵地の有無、その取り扱いについて照会を受けた。これに対し町教育委員会は、今後の対応について富山県埋蔵文化財センターと協議を図り、当該申請地が周知の遺跡である八塚C遺跡の隣接地であることから、事業計画地約29,500m²を対象とした分布調査を実施することになった。

平成7年12月、町教育委員会は県埋蔵文化財センターの協力を得て分布調査を実施した。調査の結果、当該地の北東に隣接する八塚C遺跡がさらに南側、事業計画地のはば全域に広がるものとして捉えられた。この結果をもとに関係者間で再度協議を行い、遺跡の範囲および遺存状況等の確認を目的とした試掘調査を実施することで合意した。

試掘調査は町教育委員会が調査主体となり、県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けて、平成8年6月に実施した。調査の結果、事業地のおよそ6割を占める約18,500m²において中世後期段階に帰属すると見られる遺構・遺物が確認されたため、調査結果を事業者に説明するとともに遺構の保護措置について関係機関と協議を重ねた。事業の性格上、計画変更による現状保存は困難であり、記録保存を前提とした発掘調査を実施する方向で協議は進められた。これに伴い町教育委員会では発掘調査の計画策定を進めたが、調査範囲や調査費用の負担方法をめぐって事業者側との調整が困難を極め、膠着状態が続いた。平成9年度に入り、ようやく事業者側との協議が合意に達し、県埋蔵文化財センターに調査員の派遣を依頼して本調査を開始、6月から12月にかけて約10,500m²の調査を実施した。その結果、中世の掘立柱建物・土坑・井戸・溝・近世から近代の用水跡の遺構が存在することを確認、遺物は弥生土器、古代の須恵器、中世の土器類・珠洲、青磁、瓦器、瀬戸美濃、懸仏、近世の越中瀬戸、伊万里等が出土した。

平成10年度は、約7,500m²が調査範囲として残っていた。このうち約1,000m²については公園予定地となっており、現状保存が可能であると思われた。このようなことから、関係機関と協議を重ねた結果、期間短縮や経費軽減ということを考慮して、この公園予定地は今回の本調査範囲から除外することで事業者側との協議が合意に達した。これに伴い町教育委員会では調査の事前準備を開始するとともに、県埋蔵文化財センターに調査員の派遣を依頼して、4月上旬から約6,500m²の本調査に着手することになった。

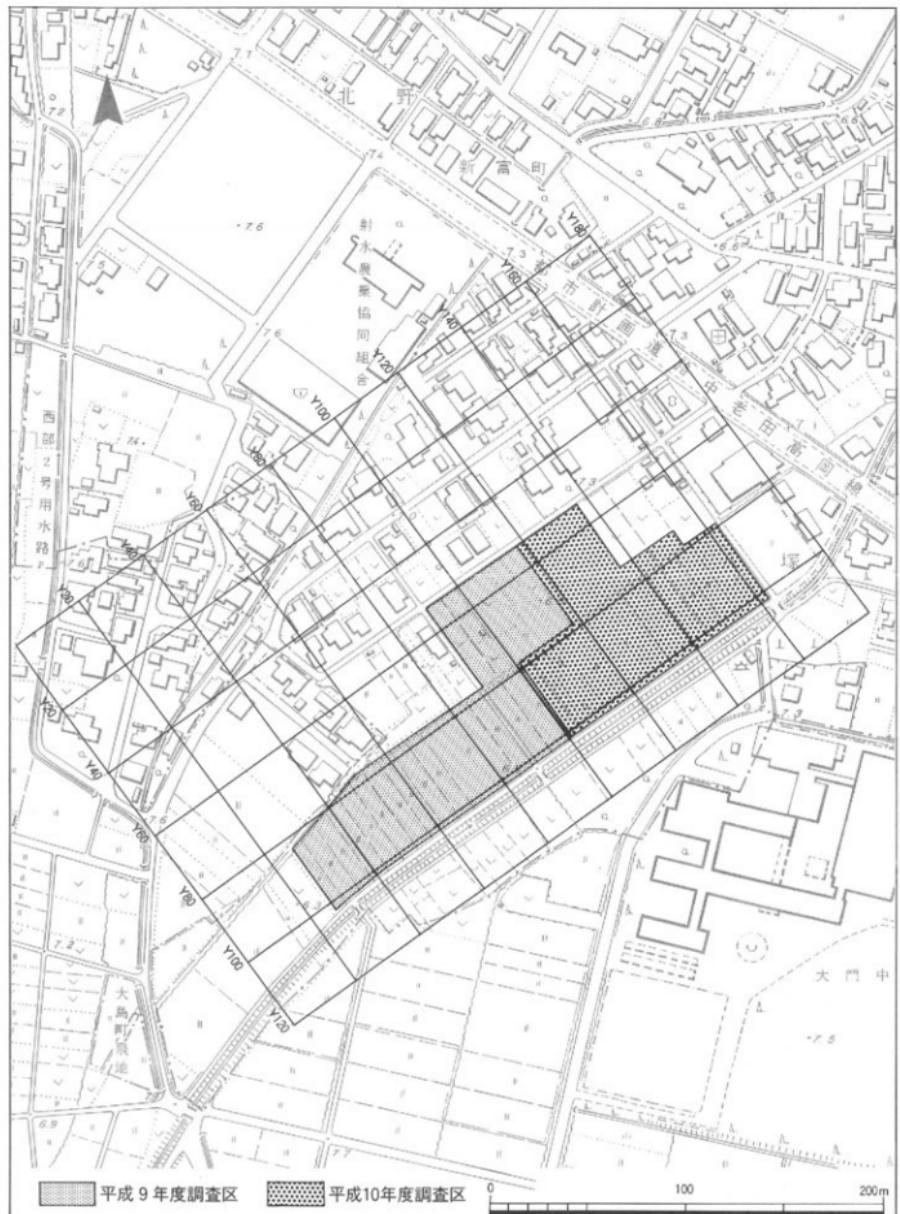
（田中）

III 調査の概要

1 調査区の位置と区割り

調査対象地は、和田川とその支流によって形成された微高地の東側縁辺部に位置しており、平成9年度の調査範囲であったA～C地区の北東側にある。現況は7m前後を測る休耕田・畠地であり、耕地面積等の地形変化により均平化され、全体に平坦な地形を呈する。しかし、地山の土層堆積を見ると、北西から南東方向に緩やかに傾斜する地形であったことが観察できる。

今回の調査範囲は第2図に示すとおりで、平成9年度にA～C地区で地形等にあわせて設定した2m×2mを一区



第2図 調査区の位置と区割図（1/2,500）

画とするグリッドをそのまま延長して使用した。また、調査区を二分する用水があることや掘削残土の処理の関係上、任意にD・E地区（Y77付近、現用水より南東側がD地区、北西側がE地区）の2ブロックに分割して調査を進めていった。

2 調査の方法と経過

調査は、任意に設定したD地区の北東側より順次進めていった。4月22日より、調査員立ち会いのもとに重機による表土除去を開始した。D地区の表土除去終了後、10m間隔に測量基準杭を打設し、2m×2mを一区画とするグリッドを設定した。5月11日から遺構検出作業を開始した。検出終了後、個々の遺構ごとに掘削・記録作業を行った。遺構掘削・記録作業等の終了した区域から、簡易通り方測量によって1/20で遺構の平面図化を進めた。全景写真撮影・平面図化終了後、補足作業として人力で完掘できなかった土坑や井戸を重機により断ち割り、土層の確認・記録作業を行った。同様の手法により、E地区へと調査を進め、11月6日には全体の調査を終了した。

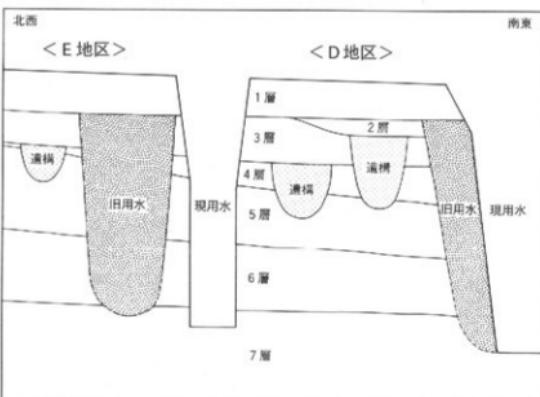
なお、D地区においては面積や日程の関係上、全景写真を一度で撮影することは不可能であったため、X135ライン附近で遺構の密度が低くなったところを一区切りとし、2回に分けて全景撮影・断ち割り確認等を行った。

3 層序

調査対象地一帯は、昭和初期の洪水災害の際に、流出した他地区的耕作土を補うために表土が削土・搬出された。これに起因して擾乱が著しく、本来的な土層堆積が残っていないのが現状である。したがって、試掘調査と平成9年度の本調査で確認された基本土層をもとに、今回の調査における補足点を記す。

層序はところどころでその堆積に変化が見られるものの、おおむね7層に区分することができる。1層：褐灰色シルト（15~20cm）、2層：褐色～暗褐色砂質シルト（5~10cm）、3層：灰黄色シルト（15~20cm）、4層：黒色粘質シルト（10~30cm）、5層：灰褐色粘質シルト（10~30cm）、6層：灰色～緑灰色砂・シルトの互層（40~50cm）、7層：灰色砂（30cm～）と堆積している。

各層の性格としては、1層が表土・耕作土であり、本層は調査に先立ち重機で除去している。2層は中世後期の遺物包含層であり、また検出した遺構の主たる覆土となっている。3層がこの調査地区における遺物検出面となり、本層より下層が地山となる。4層は腐植を多量に含むビート層であり、7層は地下水を含む湧水砂層である。なお、2層については、試掘調査時に事業計画地北東端部においてのみ堆積が確認されていたが、D地区X155~162 Y95~100のエリアにわずかに残存するのみであった。



今回の調査では、遺構の検出は基本的に4層上面で行っているが、D地区の南西部やE地区的北西部など、一部においては5層上面で検出している。これは先に触れた削土・擾乱の影響によるもので、3層のみならず、4層さらにも削平され、荒れた状態であったことによるものである。

第3図 基本層序模式図

4 遺構

検出した遺構には、掘立柱建物6棟、柵2列、土坑約350基、井戸13基、溝・水路約30条がある。しかし、前項でも触たように、昭和初期の削土の影響により本来の遺構検出面もさることながら、地山の一部すら消失している箇所がある。遺存状況は極めて不良といえる。したがって各遺構の規模については、検出できた状態のものであることを断つておく。

遺構の分布状況としては、SD43に囲まれたX150~162Y87~100区と、SD49・SD50に囲まれたX106~128Y85~95区において、掘立柱建物や土坑等が集中している。

掘立柱建物・柵（第6~8図 写真図版2・3）

D地区において掘立柱建物6棟、柵2列を検出した。柱根を残しているものはなかった。いずれも遺存状態が悪く、その形態、規模等は再現できているとは言えない。しかし検出状態での概要を示すものとして、規模等は桁行×梁行で表し、桁行と想定でき得る方向をもって建物の主軸とした。また、柱列に重みが生じている場合には、柱間の距離をそれぞれあげてある。

SB04 D地区X155~160Y90~95区で検出した。3間×1間の規模をもち、柱間は桁行のP1からP3までが3.2m+2.2m+2.2m、P5からP8までが2.9m+2.2m+2.2m、梁行は2.6mを測り、主軸方向はN-59°-Eである。柱穴の掘り方は直径40~60cmの円形で、検出面からの深さは20~80cmを測る。P1とP5は主軸に対してそれぞれ5°ほど南へずれているが、柱痕跡と思われる覆土の堆積が見られるため、柱列の一部とみなした。

SB05 SB04と隣接したX156~160Y90~92区で検出した。2間×1間の規模をもち、柱間は桁行2.4m+2.0m、梁行は3.0mを測り、主軸方向はN-45°-Eである。柱穴の掘り方は直径40~60cmの円形で、検出面からの深さは40~80cmを測る。P1とP4については主軸に対して5°ほど外側にずれている。また柱間の距離にもばらつきが見られるが、柱痕跡が見られる。

SB08 D地区X121~123Y90~92区で検出した。1間×1間で、柱間の距離は桁行4.2m、梁行3.8m、主軸方向はN-74°-Eである。柱穴の掘り方は直径40~60cmの円形で、検出面からの深さは20~60cmを測る。

SB09 D地区X119~122Y89~92区で検出した。2間×1間の規模をもち、柱間は桁行がP1からP3までが3.0m+4.0m、P4からP6までが4.2m+3.0m、梁行5.6mを測り、主軸方向はN-67°-Eである。柱穴の掘り方は直径80~120cmの円形・楕円形で、検出面からの深さは40~80cmを測る。他に比べて柱穴の掘り方が深く、中世上部器皿片が数点出土している。

SB10 D地区X117~120Y86~91区で検出した。2間×1間の規模をもち、柱間は桁行4.2m+4.2m、梁行6.0mを測り、主軸方向はN-24°-Wである。柱穴の掘り方は直径40~50cmの円形・楕円形で、検出面からの深さは20~40cmを測る。柱根は残存していないが、P4については柱痕跡が確認できる。

なおSB09とSB10についてはP2同士が切り合っており、平面上の検出ではその新旧関係について判断しかねるものであったが、断面観察からSB09のほうが新しいものと確認できた。しかし覆土の堆積状態から、それほど時間差があったとは思われない。

SB11 D地区X110~112Y91~94区で検出した。2間×1間の規模をもち、柱間は桁行2.4m+2.6m、梁行3.0mを測る。柱穴の掘り方は直径20~30cmの円形で、検出面からの深さは20~30cmを測る。他の建物群に比べ、柱穴の掘り方・深さともに規模が小さく、また覆土の堆積状態も単層である。このエリア（X107~113Y84~95）は地面がゆるやかに隆起しているため、昭和初期の削平の影響を大きく受けたとも考えられる。

SA03 D地区X117~122Y86~90で検出した。SB10を囲むように位置している。柱間の寸法は不揃いで、P1からP4までが2.2m+2.2m+2.8m、P4からP7までが4.8m+3.8m+3.4mで、全長19.2mとなる。

土坑（第4～7・13図 写真図版2～4・5）

調査区全域で約350基を検出した。その多くはSD43で開まれた所と、SD49・SD50で開まれた付近に集中しているといえる。直径20cm程度のものから2mを超えるものまで様々であり、遺物を伴うものもいくつかある。以下、覆土の堆積状況・出土遺物等、特徴のあったものについて例をあげて概要を記す。

SK314 D地区X152Y91区で検出した。およそ50cmの円形を呈し、検出面からの深さは約40cmを測る。断面観察から柱痕跡が確認でき、直径10cm程度の柱材が想定される。掘立柱建物の柱穴と考えられるが、試掘トレンチや調査除外地に隣接していることもあり、建物として検出するには至らなかった。

SK343 D地区X160Y88～89区で検出した。1.8m×1.4mの長円形を呈し、検出面からの深さは1.1mを測る。検出時には大型の円形であることなどから井戸と考えていたが、重機で断ち割った結果湧水層には達していなかったため、土坑として扱った。断ち割り後に残りの覆土を掘ったところ、覆土の②層より中世土器皿が、また底面付近からは漆器碗が出土した。

SK404 D地区X125Y90区で検出した。2.8m×1.3mの不整形な楕円形で、検出面からの深さは約80cmを測る。完掘したところ、掘削面は完全には湧水層には達しておらず、他の例を見ても井戸とは考えにくい。機能・用途については不明である。遺物は口縁部の残存率が20～60%程度の土器皿、珠の破片等が出土している。

SK448 D地区X120～121Y88区で検出した。90cm×120cmの長円形を呈し、検出面からの深さは約50cmを測る。覆土の堆積状況としては、分層できないようなブロック状の土が混ざった状態で埋まっており、このような覆土の堆積は他にもいくつか見られる。中型から小型の土坑が多い。

SK600 E地区X127～129Y77区で検出した。2.4m×2.0mの不整形な円形を呈し、検出面からの深さは95cmを測る。**SD37**（旧三ヶ用水）と現用水に挟まれた所に位置しており、D地区を含めても周囲に関連する遺構は認められない。出土遺物は、底面付近で曲物の底板と思われる丸板が出土している。

以上いくつかの土坑について規模等を具体的に示したが、総的には小型で、覆土は単層またはそれに近いものが多い。この中には木根その他擾乱によるものも含まれていると思われるが、柱穴の掘り方を残しているものもある。これらには建物として確認しきれなかったものもあると考えられる。

井戸（第4～7・12図 写真図版7・8）

D地区内に点在する18基を検出した。そのほとんどがSD43の付近と、SD49・SD50に開まれた遺構密集地に存在している。形態的には1m前後の掘り方を持つ素掘りのものである。検出面からの深さは1mから1.7m程度であるが、それぞれ7層の湧水砂層まで達している。湧水層までの掘り方は、円筒形ないし上端部を擂鉢状に掘り込んだあと円筒形に掘りぬく有段の掘り方のものと、全体的に擂鉢あるいは漏斗状のものがある。なお井戸については人力で掘りあげることが困難だったため、全景撮影・平面図化が終了した所から重機で断ち割り、セクション等を確認した。

SE30 D地区X161～162Y89区で検出した。約1.4m×1.5mの不整形な円形を呈し、検出面からの深さは1.1mを測る。擂鉢状の掘り方をもつ。覆土の①層より中世土器皿、曲物の底板と思われるもの、また底面付近から加工された板材等が出土しており、他の遺構に比べて木製品の出土が目立つ。

SE33 D地区X156～157Y91～92区で検出した。約1.7m×1.5mの不整形な円形で、検出面からの深さは1.6mを測る。上端部が検出面から50cmほど擂鉢状に掘り込まれており、そこから湧水砂層まで円筒形に掘りぬかれている。

SE34 D地区X156Y88区で検出した。1.2m×1.1mの円形を呈し、検出面からの深さは1.6mを測る。上部の直径に対し、底面は20cmにも満たないほどの、かなり鋭角的な漏斗状の掘り方である。

SE36 D地区X161Y95～96区で検出した。90cm×90cmの円形を呈し、検出面からの深さは1.2mを測る。覆土の④・⑤層には礫が混入しているが、人為的構築の跡は見られない。しかし他の土坑にこのような礫の混入はほとんど

認められない。出土遺物は土師器の破片や珠洲等で、このうち珠洲についてはSK176内より出土したものと接合している。

SE38 D地区X127Y89区で検出した。90cm×90cmの円形を呈し、検出面からの深さは約1.2mを測る。検出面からほぼ垂直の円筒形に掘り込まれている。覆土の④層は粘質土のなかに多量の腐植が混入しており、そのせいであろうか、土にしまりがない。

SE41 D地区X123Y91区で検出した。90cm×80cmの円形を呈し、検出面からの深さは1.3mを測る。掘り方は不整形な擂鉢状で、底面付近から曲物が出土している。

SE42 D地区X118Y92区で検出した。2.0m×1.9mの円形を呈し、検出面からの深さは約1.7mを測る。掘り方は不整形な擂鉢状で、覆土は全体的にしまりがない。遺物は覆土の①～③層にかけて中世土師器皿片が、④層底面付近から五輪塔の火輪・水輪・地輪が出土している。

溝・水路（第4・5・9～11図 写真図版5・7）

調査区全域にわたって約30条を検出した。これらの溝は自然流路的なものと、人為的なものとに大別することができる。前者は幅・深さともに規模は小さく、掘り方にも企画性が見られない。一方後者は、SD43・SD49・SD50（SD47と同一）など、明らかに区画溝としての機能を有するものに代表される。また、旧地籍図の地割りに沿っているものも見られ、これらは水田畦畔沿いの水路とも考えられる。

SD41 D地区X150～162Y95～101のエリアを南北に流れる。幅は2.0m前後、検出面からの深さは40～45cmを測る。遺物は珠洲（甕・擂鉢）・青磁碗の他、底面付近から須恵器の高杯脚部等が出土している。隣接するSD46やSX04との関係は、断面観察・出土遺物等から見て古いものと考えられる。

SD43 D地区X150～160Y88～91を南北に縱走し、X160Y88区で東へ屈曲している。幅50～60cmで、検出面からの深さは20～30cmを測る。SB04・SB05等を囲むように位置しており、いわゆる区画溝としての機能を有すると考えられる。しかし調査区外へと延びているため、どのくらいの範囲を囲むもののかは未確認である。遺物は珠洲（甕・擂鉢）や越中瀬戸（皿・向付）等の破片が出土している。

SD44 D地区X146ラインに平行して南東から北西に流れる。幅は2.4～2.8mで、検出面からの深さは50～60cmを測る。後述するSX06に流れ込んでいたものと思われる。遺物は須恵器・珠洲（擂鉢）・越中瀬戸等が出土している。

SD46 D地区的SD41に平行して検出された。幅30～120cmで、検出面からの深さは50cm前後を測る。溝の底のレベルは北に向かって下がっている。X150Y99付近で調査除外地にかかってしまいどの方向に延びていくのか確認できなかった。出土遺物は珠洲・唐津などである。

SD47・50 SD47はD地区X134ラインに平行して検出された。幅は1.2～1.8mで、検出面からの深さは50～60cmを測る。出土遺物は中世土師器皿・珠洲・越前・青磁等である。SD50はD地区X106～130までを大きく区画する溝として検出された。X108Y97区が屈曲角部にある。幅1.4～4.8m、検出面からの深さは50～90cmを測る。遺物は中世土師器皿が最も多く、須恵器・珠洲・五輪塔・茶臼・越前・白磁・青磁他各種のものが出土している。

SD47については、どの方向に延びていくのかということと、その他に、後述のSD49の肩部のラインを確認する目的で、調査除外地ではあったが、X132～135の間を幅8mに限って表土除去後検出までを行い、概略図化した。その結果、X132Y101区でSD47が屈曲してSD50とつながり、D地区内をコの字型に囲む形となることが分かった。調査除外地での確認であり、各記録作業後ということもあるが、遺構番号はそのままとした。またSD50についてはすでに調査が終わっているC地区に向かって延びていたが、平成9年度の調査ではSD37と現用水に挟まれたところは搅乱がひどく、これに続くものは検出できていなかった。今回再度掘り下げて検出したところ、SD50がSD37に合流することがかろうじて確認できた。付図に修正を加えてある。

SD49 D地区X131ラインと平行に検出され、Y96で屈曲する大型の区画溝である。幅2.9~5.0m、検出面からの深さは60~120cmを測る。SD50の内側をひと回り小さく囲むように位置している。出土遺物は主に中世土師器皿（完形品を含む）で、他に須恵器・珠洲・砥石・越前・瀬戸美濃等があるが、なかでも特筆すべきものとしては、X130 Y89区内の底面付近で、墨書のある折敷が出土している。

SD62 D地区X103~113 Y93区でSD50に切られるかたちで検出された。幅1.0~1.3mで、検出面からの深さは20~50cmを測る。断面観察から短時間で埋まったものと思われる。

SD69 D地区X112~113 Y79~84区で検出した。幅2.7~3.0m、検出面からの深さは40~50cmを測る。SD50と平行していることや規模等から見て区画溝とも考えられるが、D・E地区ともにこれに続く遺構が確認できなかった。出土遺物は中世土師器皿等である。

SD70 E地区X133~135を南東から北西へ流れ、調査区外へと延びる。幅80~150cmで、検出面からの深さは20~30cmを測る。出土遺物は中世土師器皿、珠洲の破片などである。

SD71 E地区X119~134 Y55~58区で検出した。幅4.6~4.8m、検出面からの深さは15~20cmを測る。浅くて幅広のこの遺構はC地区で検出されたSD40と同一のものと考えられる。しかし遺存状況が悪く、SD40で見られた両壁に沿うかたちでめぐっていた幅15~20cm、深さ10~15cmの側溝状の溝がはっきりとは検出されなかった。遺物は出土していない。

SD35 E地区Y70~71のラインに平行して検出された。幅1.1~1.3m、検出面からの深さは60cm前後を測る。C地区で検出された溝が直線的に続いており、調査区外の北東方向へ抜けている。方向・掘り方ともに同じような様相を呈している。

不明遺構（第4・5・9図 写真図版2）

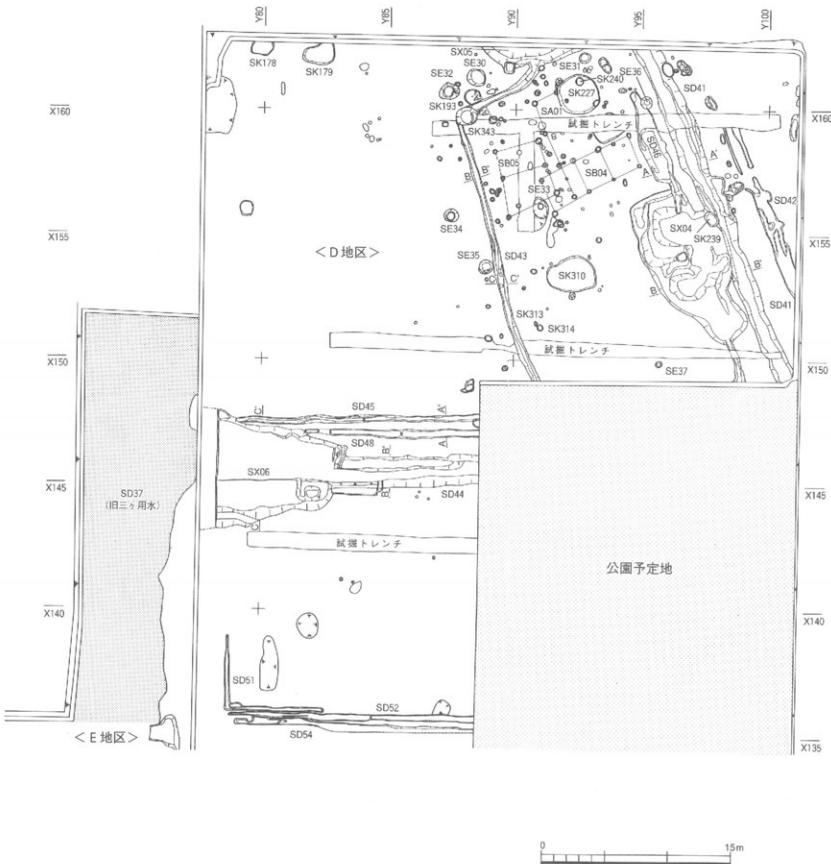
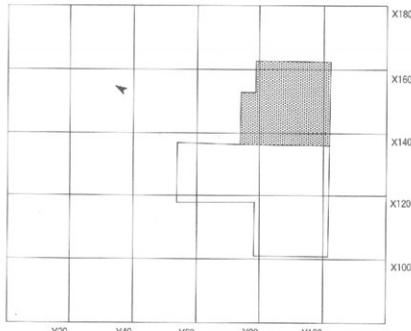
D地区内で3基の不明遺構を検出した。これらは土坑というには規模が大きく、すべて溝と合流している。池状の遺構と考えられる。

SX04 D地区のSD46が膨らんだような、池状の遺構が検出された。長径12m、幅3~7mの不整形な長円形を呈し、検出面からの深さは50cm前後を測る。X154~157区で並走するSD41と覆土が類似しており、検出時に平面状態で切り合いを確認することはできなかった。サブトレレンチを入れたところ、断面観察でSX04のほうが新しいことがわかった。遺物は土師器・瀬戸美濃・珠洲（描鉢）等の破片が出土している。

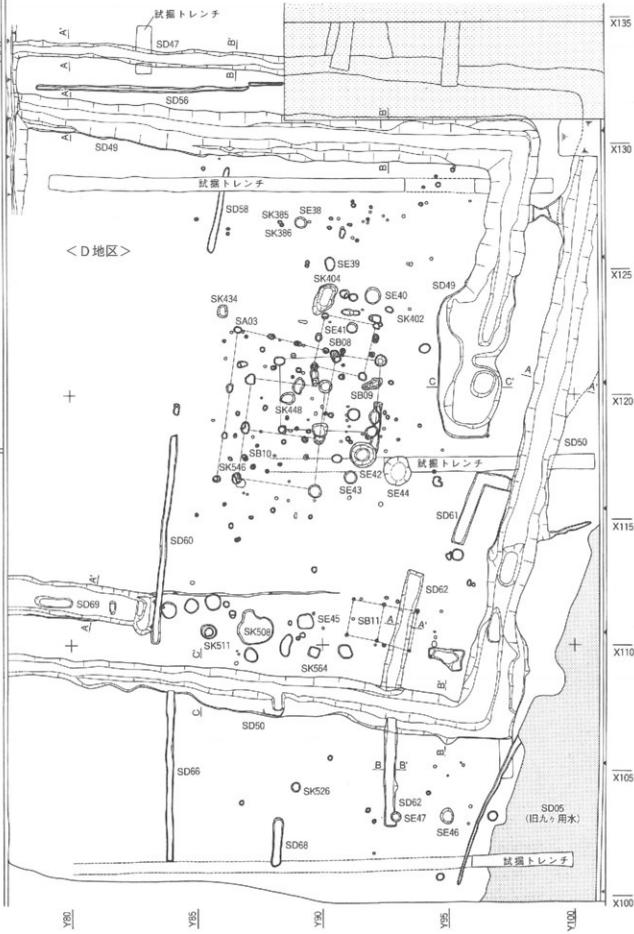
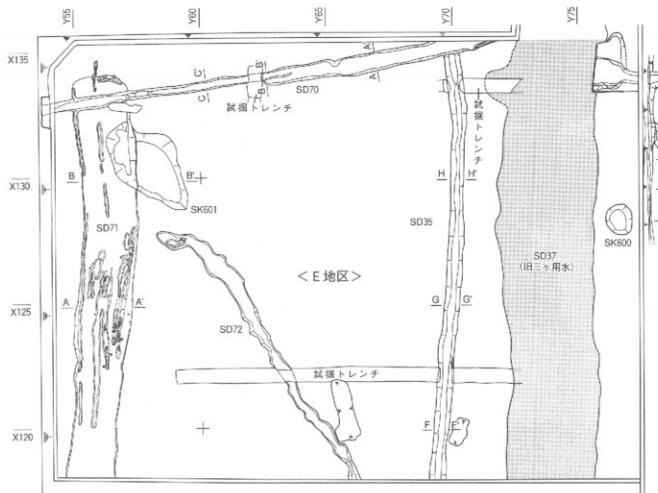
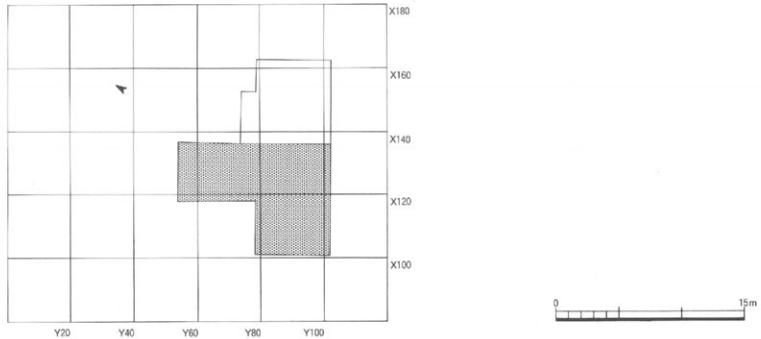
SX05 D地区X162 Y89~93区で検出した。調査区北東の端で検出された為、規模等については正確に確認できない。SD43が流れ込むような形になっており、検出できた範囲では掘り込みが湧水層に届くほどとなった。遺物は珠洲の出土が多く、底面付近では砥石・唐津なども出土している。

SX06 D地区X144~148 Y78~83区で検出した。幅は4~9m、検出面からの深さは50cm前後を測る。SD44が合流する池状の遺構であるが、北西側E地区内がSD37（旧三ヶ用水）や現用水による擾乱を受けており、サブトレレンチによる確認においても形態・規模の詳細は判然としなかった。遺物は珠洲、越中瀬戸、肥前磁器の染付碗等が出土している。

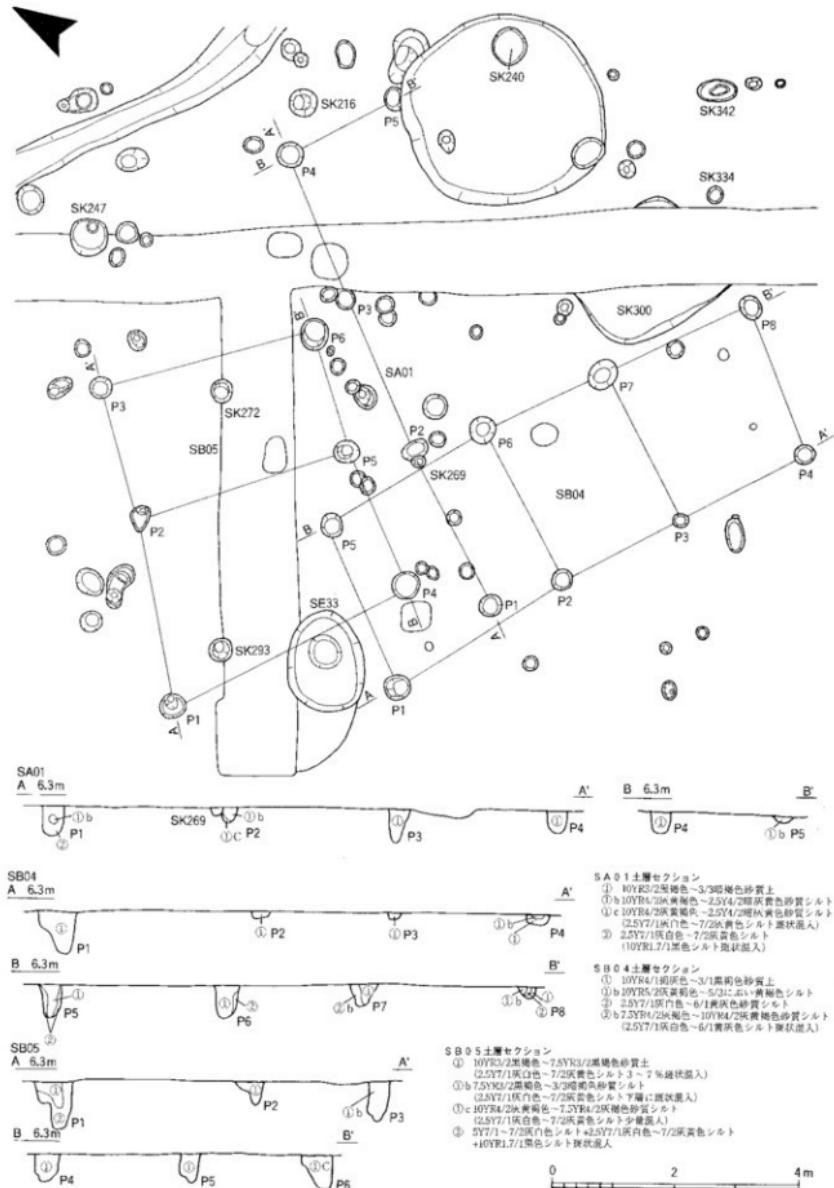
(大友)



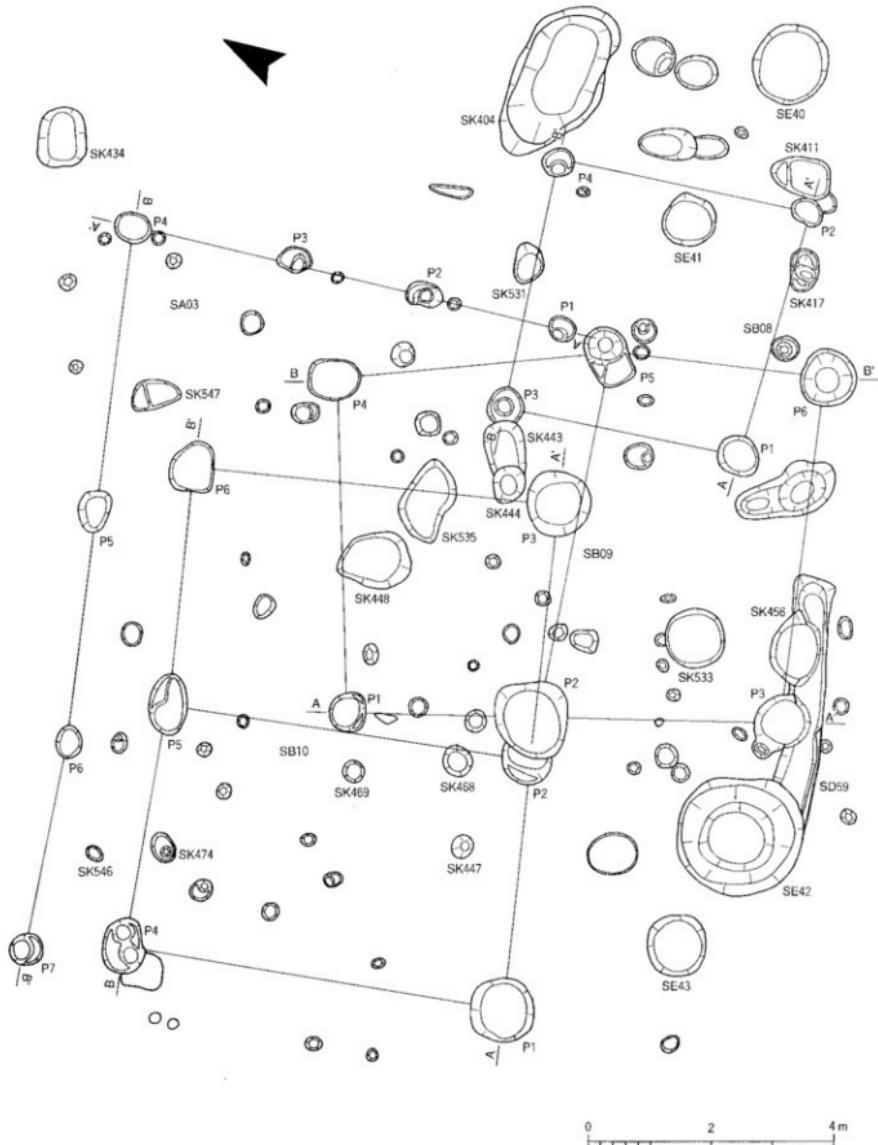
第4図 遺構配置図 (1/300)



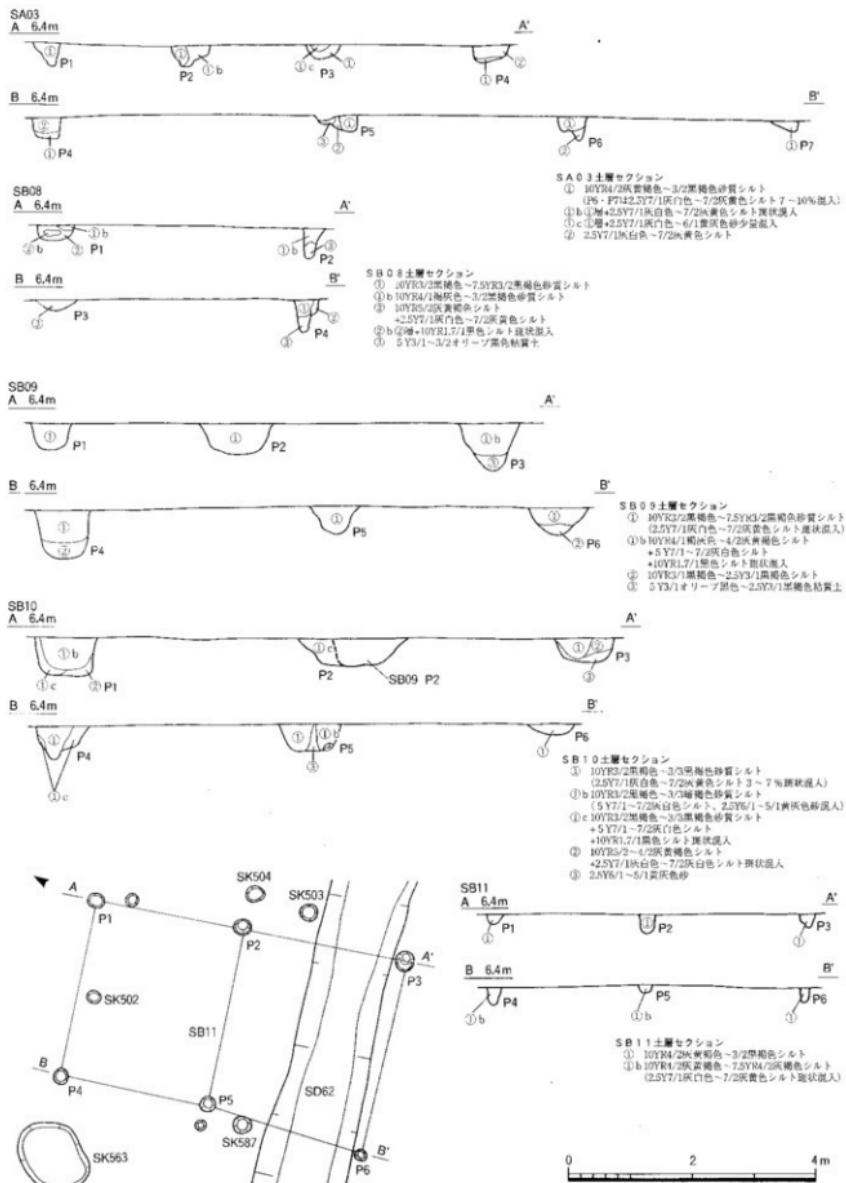
第5図 進構配置図 (1/300)



第6図 遺構実測図 (1/80)

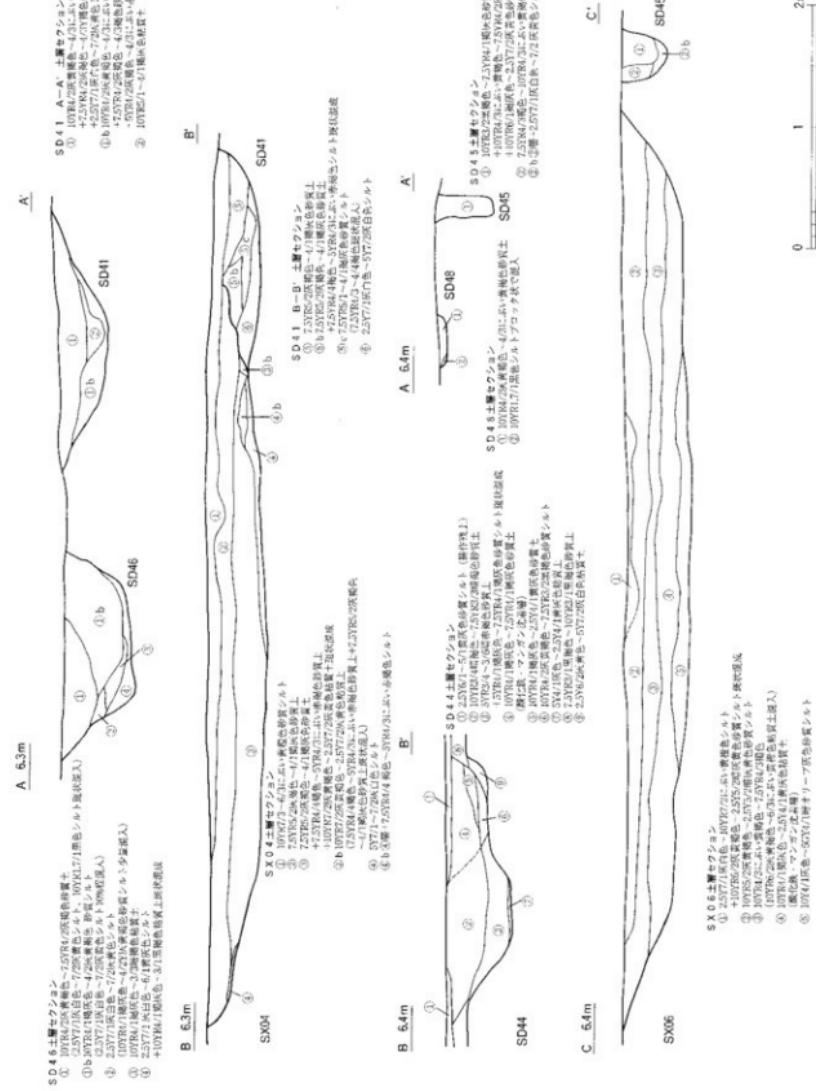


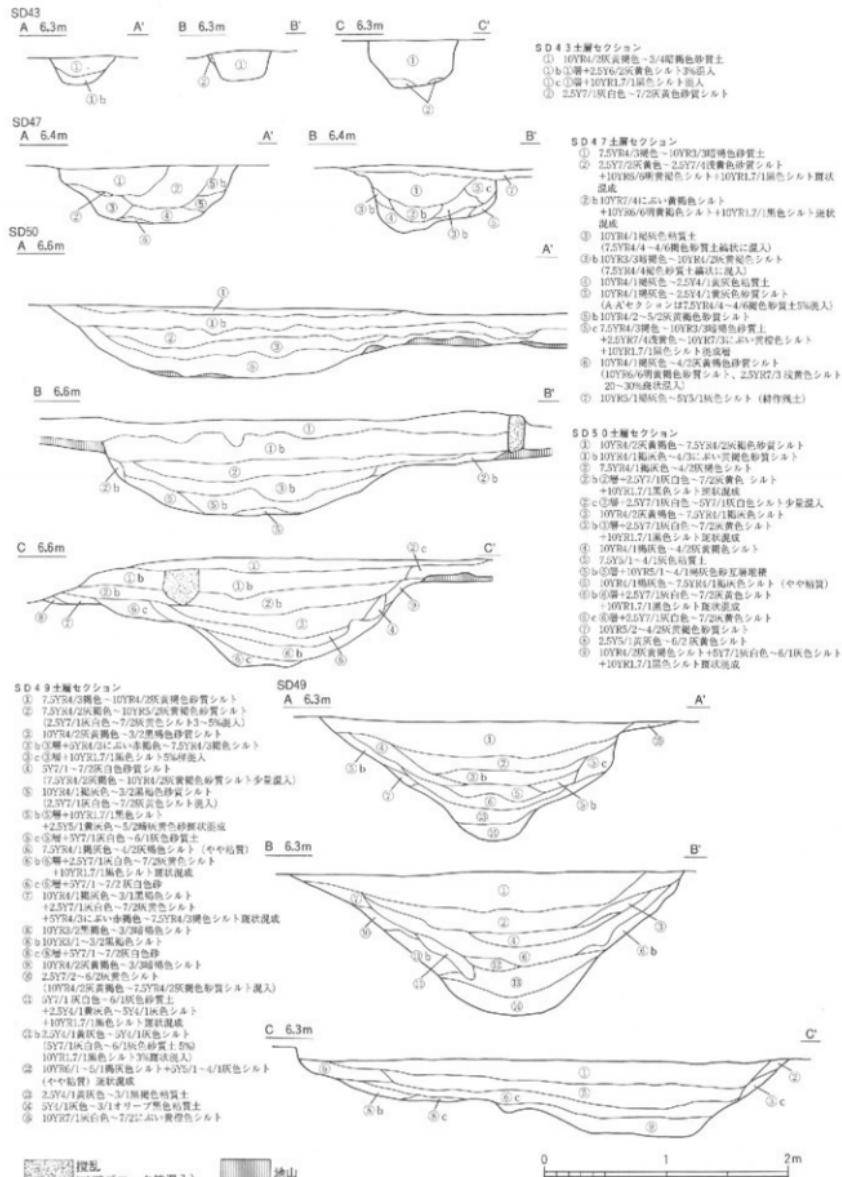
第7図 遺構実測図 (1/80)



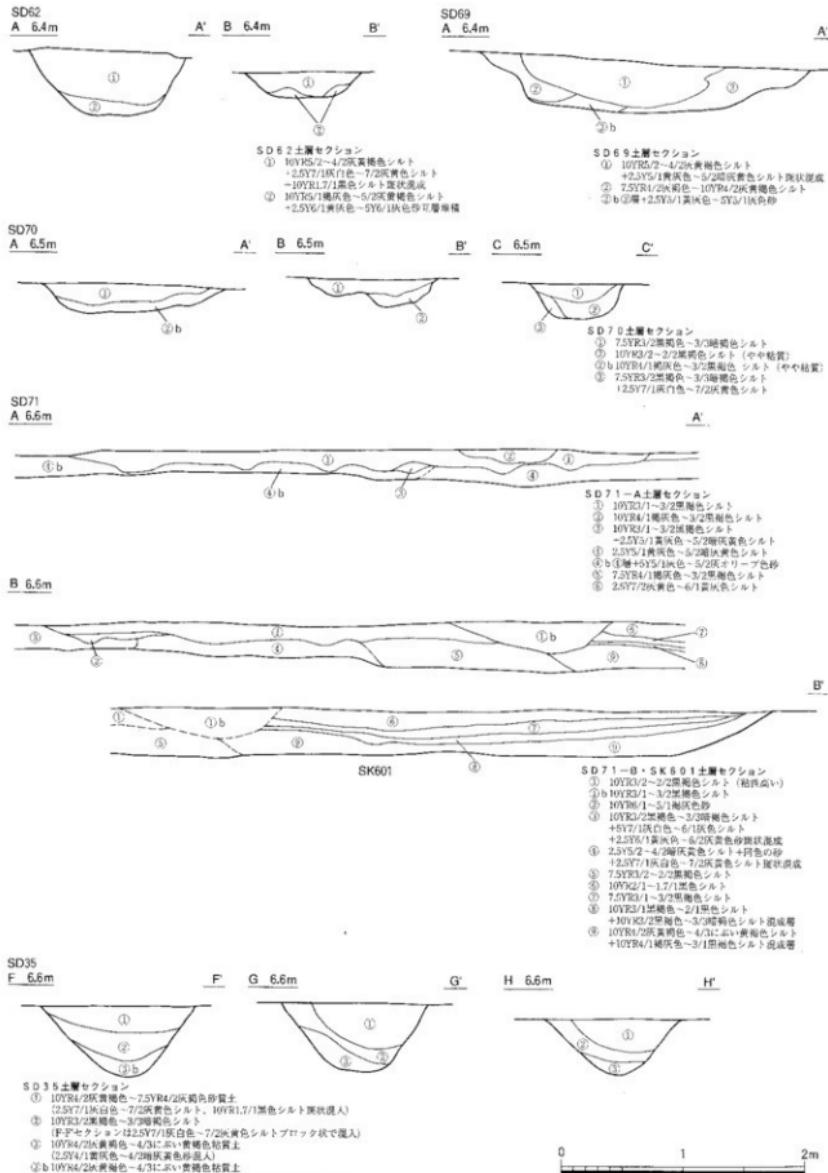
第8図 遺構実測図 (1/80)

第9図 遺構実測図 (1/40)

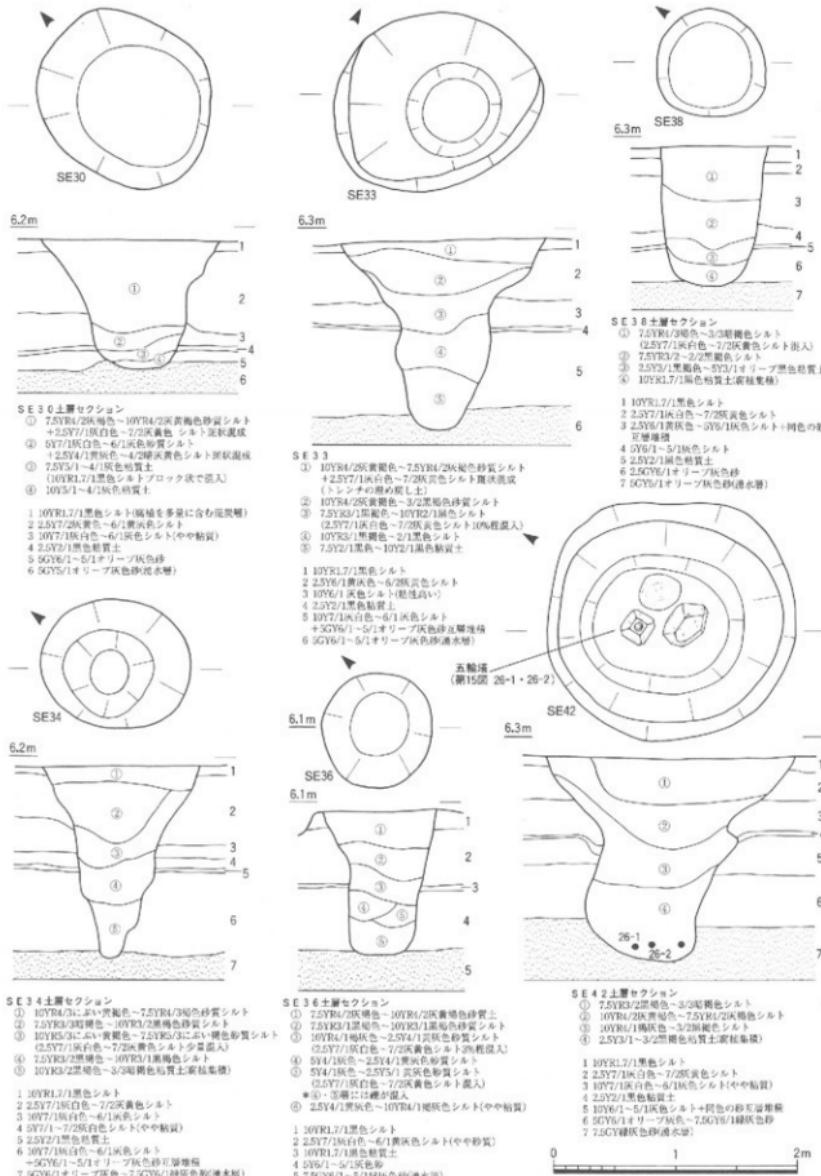




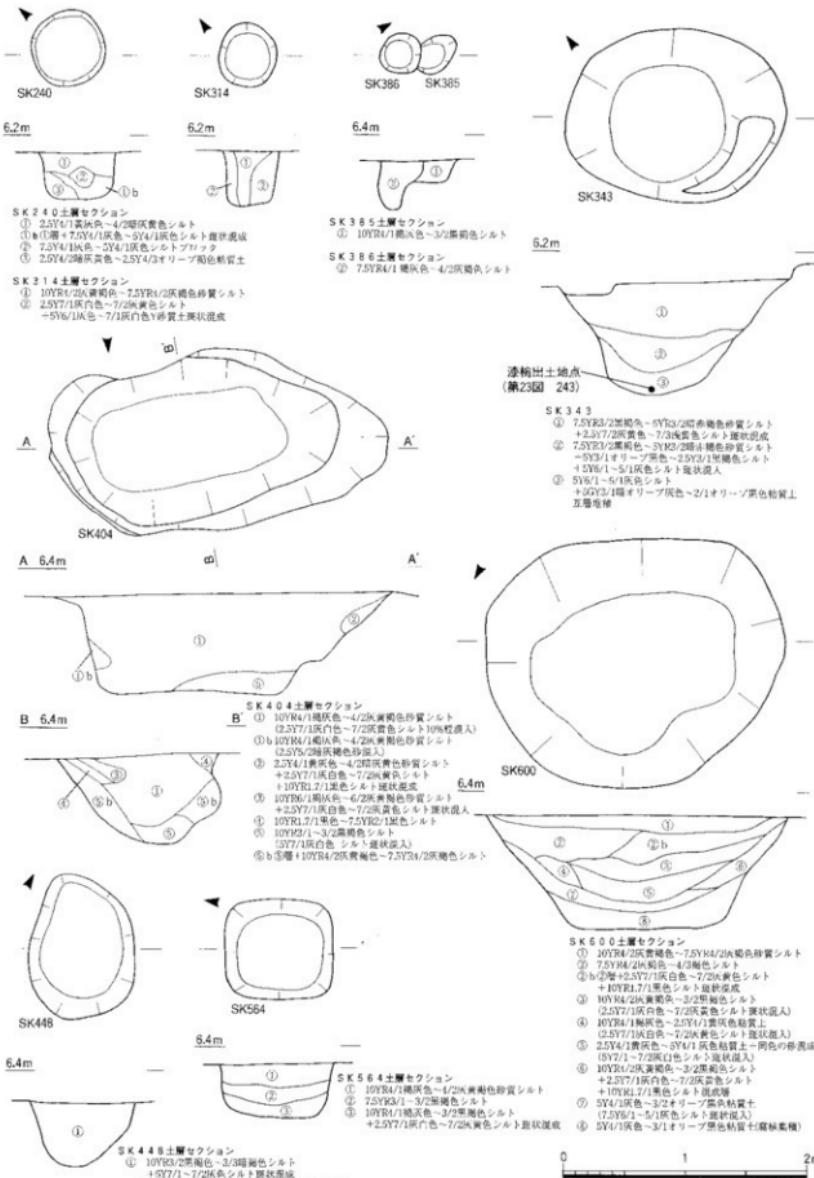
第10図 遺構実測図 (1/40)



第11図 違構実測図 (1/40)



第12図 構造実測図（1/40）



第13図 清構実測図 (1/40)

5 遺物

出土した遺物には、縄文時代の土器・石器、古代の土師器・須恵器、中世の土師器・珠洲・越前・瀬戸美濃・青磁・白磁・青花・石製品・木製品・金属製品、近世の越中瀬戸・肥前陶磁・再興九谷・在地系陶磁器、金属製品などがある。包含層がほとんど残存していないため、遺物の多くは遺構から出土した。特に、SD49・SD50からの出土が大部分である。主体となる時期は15世紀後半～16世紀中頃である。

土師器皿は非クロが大部分で、クロ土師器は数点である。口縁部外面は軽い1段ナデである。内面では見込みにナデ、口縁部に「の」字状のナデを施している。口径は7～16cmで、8～10cm、10～12cm、13～14cm、15～16cmに分かれ。特に8～10cmのものが多い。形態・調整によって大きく4種類に分類できる。A類は丸底で、口縁部が内湾気味に外方に延び、口縁端部を丸く収める。口縁部外面に1段ナデがめぐる。B類は口縁端部を強くナデで折曲させるものである。底部が平坦なもの（1）、平坦な底部で口縁端部を水平に引き出すもの（2）、丸底のもの（3）がある。C類は丸くなった底部で口縁端部を丸く収めるもの（1）、平坦な底部で口縁端部を丸く収めるもの（2）、平坦な底部から口縁部が外方に延びるもの（3）、に分かれる。D類は体部を直線的に屈曲する。

その他、吉岡康暢氏の珠洲分類（吉岡 1996）、藤沢良祐氏の瀬戸美濃分類（藤沢 1994・1996）、大橋康二氏の肥前陶磁分類（大橋 1989）を参照した。

掘立柱建物（第15図1～4、写真図版9）

SB09（1～3） 1・2は土師器皿C 1、3はC 2であろう。2・3は口縁端部内外面に煤が付着している。

SB10（4） 4は土師器皿C 1である。

土坑（第15図5～7・10～17・21・28～32、第23図243・244、写真図版9・10）

SK176（5） 5は土師器皿Aで、内外面に煤が付着している。

SK179（32） 32は珠洲の甕の胴部である。胎土・調整から14・15世紀であろう。

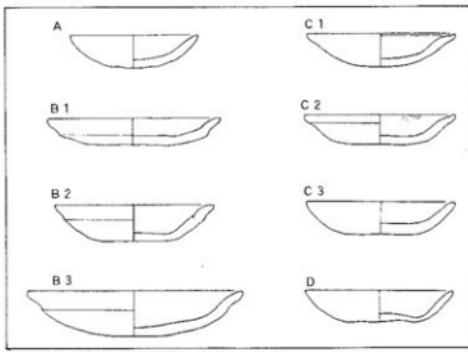
SK193（7） 7は土師器皿Aである。

SK227（21） 21は土師器皿Dである。

SK334（30） 30は珠洲の擂鉢で、幅広の端面が鋭い長三角形の口縁部である。V期の14世紀後半～15世紀前半である。

SK342（31） 31は珠洲の甕の胴部である。胎土と調整から14・15世紀であろう。

SK343（6・243） 6は土師器皿Aである。243は高台が下に踏ん張り、口縁部が内湾する漆器椀である。口径14.8cm、器高7.1cm、底径7cm。外面は黒色漆（未同定）が施され、内面に赤色漆（未同定）で草が描かれている。外底面には、底部外周に平行して「::」の字のロクロ爪痕が1箇所残っている。木取りは横木地で四つ割にした粗目取である。漆器の木取りと年輪から直径40cmぐらいの木を使用していることがわかる。樹木の顯微鏡観察は行っていないが、広組織が観察できることからブナであろう¹¹⁾。器形の類例は15世紀後半の小矢部市日の宮遺跡SE02出土の漆器椀がある。四柳嘉章氏の漆器年から考えて16世紀前半であろう（四柳 1997）。15～16世紀の県内の漆器の樹種はブナが目立つ。



第14図 土師器皿分類図

SK404 (10~17) 10・11・13は土師器皿C 1、12はC 2、14~16はB 3である。17は珠洲壺の体部片である。

SK526 (28) 28は珠洲の壺の口縁部である。方角の「く」の字の短頸口縁で、14世紀後半である。

SK546 (29) 29はゆるく外反する長頸口縁の珠洲壺である。叩打密度が粗い。14世紀後半~15世紀前半である。

SK600 (244) 244は曲物の底板で、側面の4箇所に木釘がある。直径17.9cm、厚さ7mmの柾目板である。針葉樹。底面には生漆が薄く塗られている。

井戸 (第15図8~9・18~20・22~26、第22図239~240、第23図241・242・246、写真図版9・19・20)

SE30 (18~20・239~242) 18・19は上師器皿A、20はDである。239は板目の曲物底板で、底径は推定26cm、厚さ6mmである。側面に木釘の抜けた跡が1箇所ある。240は曲物の底板で、直径は推定21cmである。側面には木釘が3箇所に残っている。厚さ8mmの板目材を使用している。針葉樹。241は曲物などの底板である。厚さ1cm、直径22cmの柾目板を使用している。底板の側縁は削られ細くなっている。242は長さ54cm、幅4.7cm、厚さ1.2cmの柾目材である。細長い短軸の角を斜め切り、隅を丸くしている。

SE39 (27) 27は珠洲壺の体部である。外面には幅5mmの「II」の刻線文がある。内面はよく擦れている。

SE40 (8・9) 8・9は土師器皿C 2である。

SE41 (246) 246は曲物である。上端は欠損して高さは分からぬが、底板は直径17.7cm、厚さ7mmの柾目材である。底板の側面には木釘が6箇所残っている。針葉樹。側板を一回巻き、さらに下端に短い帯を巻いて側板を補強している。帯は左前の合わせである。曲線的なキメカキに、外面ケビキを引き、2列縫じ・内面返し縫じ（西村 1994）で桙を縫じ始め、外面まで出なくて最後に切り離されている。

SE42 (22~26) 22は土師器皿C 1、23・24はC 2、25はB 3である。22・24は口縁部内外面に煤が付着する。26~1は五輪塔の火輪である。石材が凝灰質砂岩のため、風化を激しく受け表面がざらざらである。高さ21.5cm、軒幅26.8cmである。軒は反っているが、軒口は直立で、軒厚は7cmである。ぼぞ穴は上幅で7.5cm、下幅で5cm、深さ3cmである。ノミの工具痕のため、底面は凸凹になっている。26~2は五輪塔の水輪である。最大径は33.3cm、高さ22cmである。切口の上幅18cm、下幅14.7cmである。上面が欠けているため、少し斜めに傾斜している。側面には少しくほんでいるところがあるが、パンの梵字が彫られている。石材は白黄色の砂岩である。詳しい石質鑑定は受けていないが、26~1・2は共に水見海岸周辺の石と考えられる。また、固化していないが、この他に五輪塔の地輪がある。高さ23cm、幅27.5cm、厚さ24cmである。凝灰岩。梵字は彫られていない。これらの遺物は井戸に一括して廃棄されていることから、一体の五輪塔の各部分として組み合わせて用いられたのであろう。時期は火輪・水輪の形態から、14世紀後半の所産と考えられる。

溝 (第15図33~37、第16図38~66、第17~19図67~177、第18図178~194、第22図238、第23図、写真図版10~15・17~20)

SD35 (58) 58は長さ4cmの鉄釘である。頭部の形状は端部を三角形に延ばしたものである。断面の形状は7mm×6mmの四角形である。

SD37 (213) 213は内面を蛇の目釉剥ぎの肥前鉄釉皿である。18世紀であろう。

SD41 (38~52) 39は小型高杯の脚部で、弥生時代後半~古墳時代初めのものであろう。38は須恵器の高杯脚部である。透かしの有無は不明だが二重に沈線が巡る。焼成不良のため、黄褐色になっている。7世紀であろう。40と41は須恵器の壺で、内面は格子当て具と同心円当て具が使われている。42~45は珠洲壺で、叩打文の幅が細かいものと広いものがある。45の内面は少し擦っている。時期は14・15世紀であろう。46は珠洲壺の底部で、ロクロ目の段が、よく分かる。底径12cmで、外底面の端は擦れている。47~51は珠洲壺鉢である。48は方形の外傾口縁で、IV期の14

世紀前半にあたる。47・49は内削ぎの幅広い端面が鋭い三角形を作る口縁部で、口径32cmである。時期はV期の14世紀後半～15世紀前半である。50は幅広い端部に櫛目波状文を施し、三角形の口縁部が外開きになる。焼成不良。VI期（15世紀後半）である。51の内面はよく使用されていて、鉢目が分からなくなっている。底径13cmで、外底面に板おこし痕が残り、底面の外縁はよく擦れている。52は端反り口縁の無文青磁碗で、口径17cmである。釉は緑がかった灰オリーブ色で、細かい貫入が入る。胎土は灰白色で、黒色粒が混じる。断面には漆が付着していて、接着剤として使用している。時期は14世紀後半～15世紀である。圓化していないが、円盤状陶製品が1点ある。長さ3.5cm、幅3cm、重さ26gの須恵器片である。また唐津のタタキ壺が出土している。褐色の薄い鉄釉がかかる。17世紀である。

SD43 (53~57) 53は土師器皿Aである。54は三角形の口縁の珠洲擂鉢である。焼成不良で、海綿骨針が多く含まれている。15世紀後半である。55～57は越中瀬戸で、見込みをよく擦れている。55は削出し高台の皿である。オリーブ黄色の灰釉がかかり、見込みには釉止めの段が巡る。56は褐色の鉄釉の皿である。見込みは釉止めの段がわずかに確認できる。外底面には「西 (?)」の墨書きがある。57は削出し高台の向付である。口径11cm、器高3.2cm、底径5.2cmである。釉は鈍い黄色の灰釉で、薄い。その他、16世紀の瀬戸美濃の天目碗がある。

SD44 (33~37・65・66) 33は珠洲壺の口縁部で、長頭の方角口縁が外反する。叩打文の溝は広い。34は珠洲擂鉢の体部で、底面から出土している。内面の両端が擦れることから、この破片を砥石として再利用していると考えられる。33・34はがさがさした粗い胎土で、焼成不良から15世紀代と考える。35は珠洲壺の胴部で、叩打文が少し細かい。焼成は良好である。36は越中瀬戸の皿である。釉は鉄釉に灰釉が混じり、薄い。褐色に浅黄色がかった色である。削出し高台で、内面はよく擦れている。越中瀬戸は溝の上層から出土していることから、SX06に関連する遺物と考える。37は凝灰岩質の石鉢である。外面にはノミの工具痕が残っている。65・66は須恵器壺の破片である。その他、砥石は偏平で、長方形の鳴滌砥が2点、不成形の砂岩と泥岩が各1点ある。また、円盤状陶製品が1点ある。長さ3.2cm、幅2.9cmで、重さ13gの珠洲片である。

SD45 (59・60) 59は珠洲製の打叩を加えて断面を成形した円盤状陶製品である。2.9cm×2.5cmで、重さ13gである。60は珠洲の堀片で、長軸3.5cm、短軸2.9cmの長方形である。

SD46 (61~64) 61は珠洲擂鉢である。62は叩打文が粗い珠洲壺の底部である。内面は熱を受けて炭化している。61・62は胎土が粗く、焼成がよくないことから、15世紀であろう。64は長円形のすり石で、側面と表面を擦っている。石材は安山岩である。廃棄後に火を受けて黒くなっている。その他、SD46出土の珠洲壺には、SD41のそれと接合するものがある。

SD47 (187~193) 187は土師器皿Aである。188・189は珠洲壺の体部で、叩打文がやや広い。焼成は良好である。190は明赤褐色の越前窯で、内外面にナデ調整痕が残る。191は青磁盤の底部で、底径14cmである。釉は緑がかったオリーブ灰色で、厚い。全面施釉の後、外底面の釉を輪状に剥ぎ取る。この施釉方法から、14世紀後半～16世紀前半であろう。192は口径13.8cmの瓦質香炉であろう。外面には「の」字になると推測されるスタンプ文がある。胎土には金雲母・海綿骨針・酸化鉄が混じる。内外面には縦方向のヘラミがきが施されており、器面はツルツルであるが、黒色にはなっていない。193は断面四角形の鉄釘であろう。

SD49 (67~142) 118は須恵器横瓶の体部である。119・120は須恵器壺の体部である。外面は格子目痕、内面は同心円痕が残る。土師器皿Aは68・97、B 1は110、B 2は99～104、B 3は96・105・106・108・109・111～117、C 1は72～74・76・78・79・82・85～87・92、C 2は75・77・80・81・83～85・88～90・107、C 3は67・70・71・91・94・95、Dは98である。煤の付着しているものが多い（74～76・78・79・82・83・85・88・89・91・92・95・97・104・108・116）。特に、82・83のように煤が内外面全面に付着しているものが目立つ。85の上に69が重なって出土した。121～124は珠洲壺の体部である。焼成は良好である。胎土には金雲母・海綿骨針が混じる。125は珠洲壺の

体部である。127・128は珠洲棺鉢の体部である。胎土は共に粗く焼成が不良なので、15世紀であろう。129は円錐状の珠洲片である。長軸2cm、短軸1.8cmの略円形で、重さ6gである。130は越前の壺の体部である。肩部には1本の沈線が引かれ、その上から「^メ」の記号が彫られている。色調は黒褐色で、胎土には2mm大の砂粒が多く混じる。内面は粘土積み上げ跡がよく分かる。126は色調・胎土から越前壺の底部と考えられる。131は越前の壺の体部片である。内面には接着に使用した漆が2箇所残っている。132・133は瀬戸美濃の天目碗である。132は口唇部はわずかに直立する。133は口径11.4cmである。口唇部は直立し端部は短く外折する。134は口径12cmの瀬戸美濃皿の口縁部である。外反する口縁部には光沢のある浅黄色の灰釉がかかる。貫入が内外に入る。口縁端部の欠損部には漆が充填してある。132～134は16世紀前半であろう。135は石臼の上臼である。白面径26.8cm、高さ15.5cm、供給孔径1.4cmである。現存部分が小さいので明確ではないが、下面の目は八分画と考えられる。下面のふくみは5mmであろう。石材は凝灰岩で、気泡が多い。136は口径40cmの石鉢である。石材は砂岩である。水平の口縁端部や内面の下半は擦れている。内外面にはノミの工具痕がある。137は砂岩質の砥石である。削れていて全形不明だが、二面のみ擦れている。138は鉄釘である。頭部が三角形状を呈し、端を斜位に切り落とされているものである。長さ3.8cm、身幅6mm、身厚5mm（中央部）である。139は蹄鉄であろう。SD49の上面から出土した。140は現存長16.9cm以上の棒状鉄製品である。さびが付着していて丸くなっているが、断面は四角形である。火箸の可能性がある。141は現存長6.1cm、幅2.1cmの刀子の刀部である。142は碗形滓で、下面に炭が付着している。長さ5cm、幅4cmである。上面は磁着する。238は角切折敷である。厚さ3mmで、幅27.2cm四方の柾目板の角を切り整えている。幅2mm、高さ1.1cmの丈の低い棟が巡る。綴皮で所々止めている。外底面には「愛染坊常住」の墨書きがある⁽³⁾。広島県の草戸千軒町遺跡では14世紀頃から角切折敷が出現し、丈の低い角切折敷は15世紀後半～16世紀初頭に増加する（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1996）。245は連歛下駄である。長さ16.6cm、幅8cmの小判形をしている。歯部は台部から垂直しており、歯は調整していない。前歛は高さ3.2cm、幅2.7cm、後歛は高さ3.6cm、幅2.5cmである。木取りは台部を木表にし、歯の底面近くに木の芯がある柾目板を使う。針葉樹。台部が荒れて明確でないが、わずかに見える足跡から、左足用であろう。

SD50（143～183） 143・144はロクロ土師器杯である。水飴された胎土で、9世紀後半～10世紀初めのものである。土師器皿B1は154、B3は157、C1は145・147・149・153、C2は146・148・150～152・154～156・158である。149・153は煤が付着しているが、内外面全体に付着するものは少ない。159・161は須恵器壺の頭部である。161の内面は格子目当て具である。160は須恵器壺の頭部である。162～167は珠洲の壺である。162は内屈する長頸の口縁で、13世紀後半である。168は珠洲棺鉢の体部である。胎土は粗く、焼成が甘い。鉢目が密なところから、15世紀であろうか。169・170は越前の壺の体部である。170の内面の一部に漆が付着している。171は端反りの青磁玉縁碗で、口径14.2cmである。釉は緑がかったオリーブ灰色で、細かい貫入が走る。素地は灰色で、黒色粒が混じる。14～15世紀である。172は細書き青磁細通弁文碗で、口径11cmである。釉は薄く、オリーブ黄色で、細かい貫入が入る。15世紀後半である。173は白磁碗の底部で、底径は5cmである。素地は灰白色で、薄い透明釉がかかる。高台周辺が擦れている。13世紀のものであろう。174は大きく外反する白磁皿で、口径12cmである。素地は灰白色で、黒色粒がわずかに混じる。釉は薄く、口縁端部の内面にわずかに釉溜まりの所がある。15世紀後半～16世紀である。175・176は瀬戸美濃の天目碗である。175は口径11.4cm、器高5.2cm、底径5cmである。内面と外面上半は暗褐色の鉄釉が、外面下半から輪高台の内面まで暗紫色のサビ釉がかかる。15世紀後半であろう。176は口径11.3cmの天目碗である。口唇部はわずかに直立し、端部は短く外反する。高台周辺に削り跡が残り、にぶい赤褐色のサビ釉がかかる。15世紀後半であろう。177は瓦質の火鉢の口縁部である。全体が瓦質になっていない。口縁端部の内面が欠損しているが、口縁端部が逆「L」字状の内面に折れ曲がる器形であろう。15世紀のものである。178は蛇紋岩の小型磨製石斧である。鉢形に開く器形から、縄文時代の後晩期であろう。179は土師質の土鍤である。長さ5.2cm、幅4.2cm、孔径1.5cm、重さ

90gである。外面には傷跡が多くある。180は泥岩の砥石である。現存長6.5cm、幅2.5cmの長方形である。端は叩打痕があり、他方の端は折れている。181は茶臼の上臼である。口径は上面で20cm、下面で19cmである。高さ12cm、供給孔径1.4cmである。ふくみは破片からは認められない。台座紋様は三段の菱形である。挽木孔は深さ3.4cmである。白面のくぼみ具合から、上縁はよく擦れていることが分かる。白面の目は八分画である。石材は緑がかかった凝灰岩で、同一個体と考えられる茶臼がSD49から出土している。182は砂岩質の石鉢である。口径27.2cmで、内外面に工具痕が残る。内面は擦れている。183は砂岩質で、表面は風化を激しく受けている。高さ19.2cm（推定）で、上面は少しへんで穿孔はないが、7.5cm四方になると思われる。五輪塔の火輪であろう。軸は外反し、軸幅は3.5cmである。底面が欠損していると考えられる。

SD59（185・186） 185は土師器皿C 2、186はC 1である。

SD66（194） 194は煙管の吸口で、青銅板を合わせて作られている。吸口が「L」字形に曲がって、羅臼部の竹が残っている。近世以降のものである。

SD70（184） 184は土師器皿Aである。

不明造構（第20図195～206、第21図207～214、写真図版16・17）

SX04（195～197・199・200） 195は土師器皿C 1である。196は珠洲壺、197は珠洲擂鉢である。共に胎土が粗く、焼成不良である。14～15世紀であろう。199は越中瀬戸の皿で、口径10cm、器高2.7cmである。削出し高台は底径4.2cmである。見込みには16弁菊の印文花があり、内底面はよく擦れている。釉は鉄釉がわずかに混じる灰白色の灰釉で、薄い。外底面には「△（か）」の墨書がある。200は瀬戸の灰釉平碗で、口径17cmである。釉は黄緑色で、薄く、細かい貫入が走る。口縁形態から15世紀中頃である。その他、円盤状の珠洲、15世紀の白磁皿、16世紀の青花皿などがある。

SX05（198・201～206） 198は珠洲擂鉢の口縁部で、三角形状の口縁端部をしている。14世紀後半～15世紀前半である。201は珠洲壺の頸部、203は珠洲擂鉢の体部である。204は珠洲壺の底部で外底面には板起こしの痕がある。内面にはロクロ目の段が明確に残る。205は唐津の灰釉皿である。口径12cmで、内面に段が付く。17世紀前半である。206は砂岩の砥石である。長方形の一端は叩打痕があり、他方は折れている。現存長7.9cm、幅6.2cmである。

SX06（207～212・214） 207・208は珠洲壺である。209は肥前系磁器の染付碗である。菊散らし文様が内外面を彩る。外底面には「仁万九十八〔 〕」「九百〔 〕」の文字が朱書きされている。焼繼ぎの痕跡があることから、19世紀である。210は肥前の陶胎染付碗で、18世紀であろう。211は肥前磁器の染付碗である。底部が厚く、18世紀後半～19世紀である。212は越中瀬戸の灰釉の火入れである。214は包丁の刃先である。

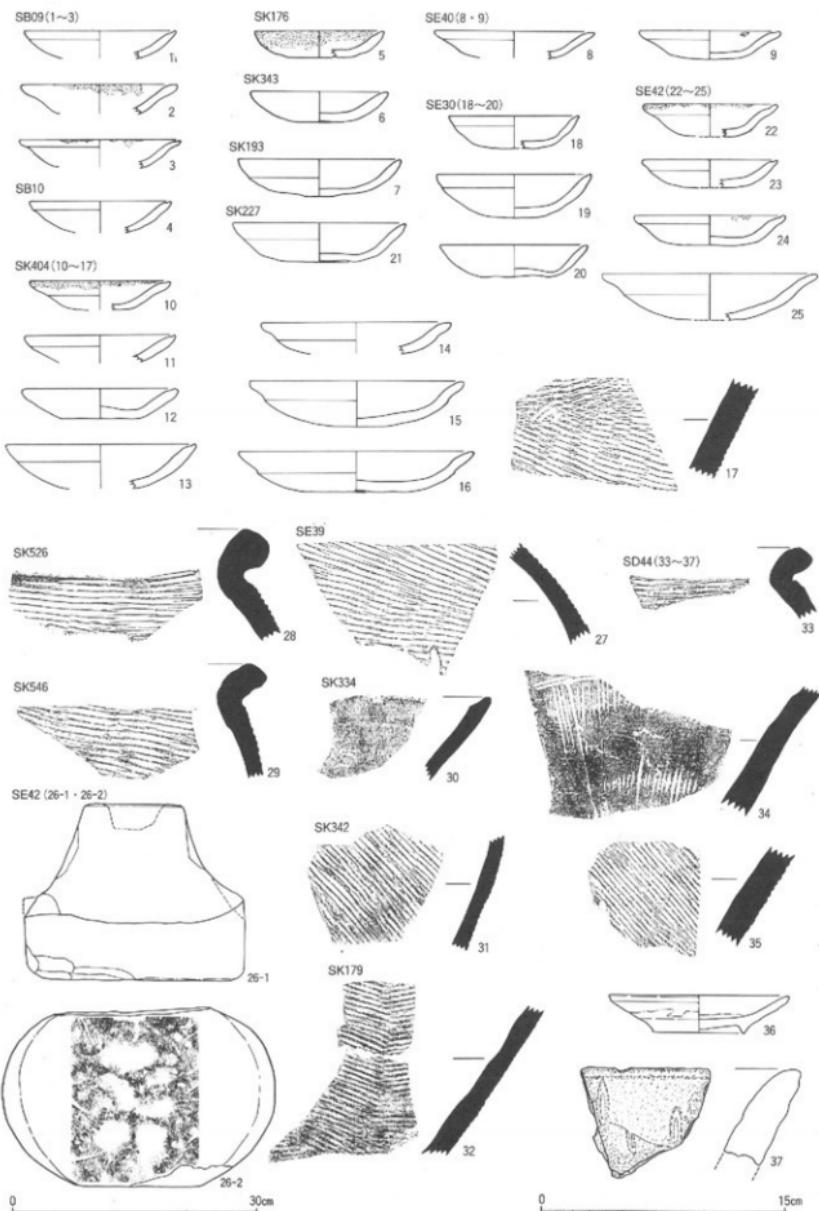
造構外出土（第21図215～237、写真図版16）

215～217は器面に条痕が走る繩文時代晚期後半の深鉢である。218は繩文土器である。219は須恵器杯で、高台が外に踏ん張る。9世紀である。220は製塙土器である。にぶい黄橙色で、輪積み痕が明確に見える。221・222は土師器皿C 2、223はC 1である。224～227は珠洲壺、228・229は珠洲擂鉢である。共に14世紀前半であろう。230は青磁絞花皿である。緑がかかったオーリーブ灰色の釉で、内面に樹脂文が施されている。15世紀である。231はフイゴの羽口で、外径は推定10cm、内径孔は2.5cmである。232は瀬戸美濃の灰釉丸皿である。口径10.8cm、器高2.2cm、底径5.2cmである。内底面は凸帯状になり、釉が剥ぎ取られている。16世紀後半である。233～236は越中瀬戸の皿である。削出し高台で、内底面は釉が剥ぎ取られている。233・235は鉄釉、234・236は灰釉である。234・235の外底面には墨書がある。237は肥前の灰釉溝縁皿で、時期は17世紀前半である。

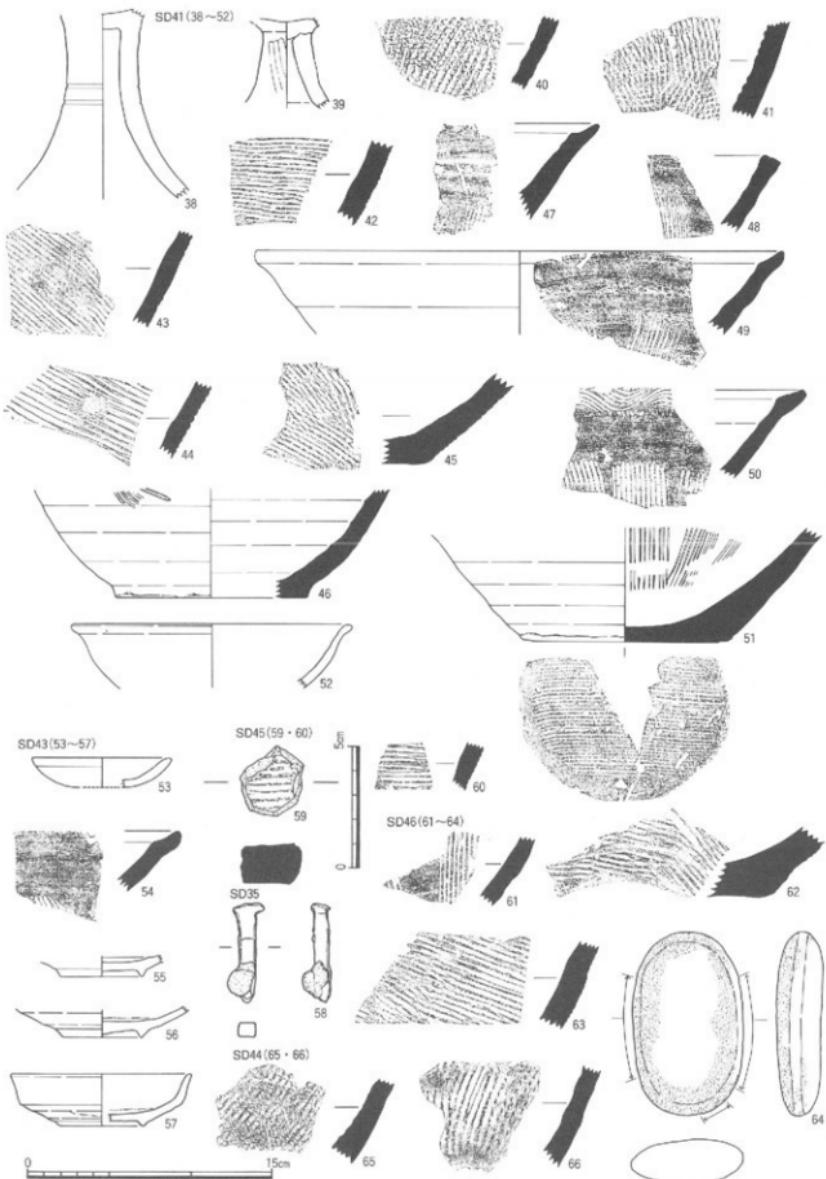
（宮田・島田）

（1） 富山県木材試験場の長谷川益夫氏のご教示による。

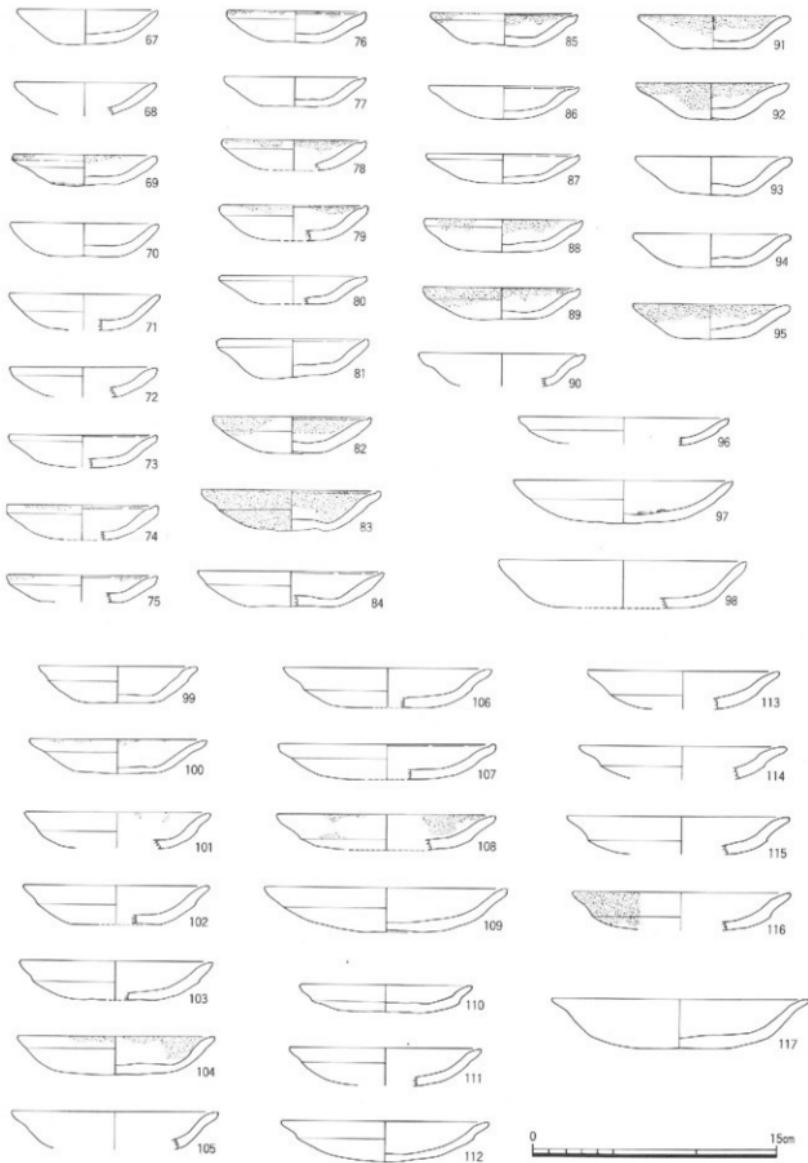
（2） 文字の解説は富山県公文書館の金龍教英氏の教示を得た。



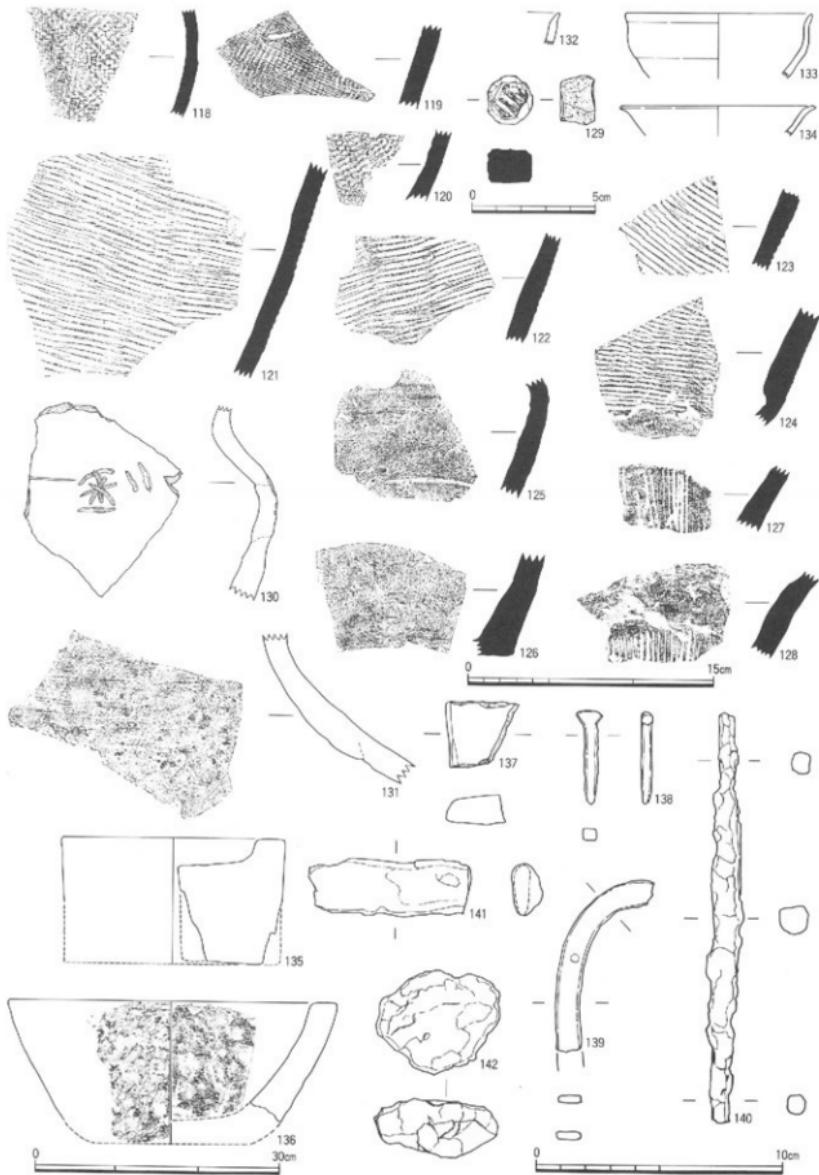
第15図 遺物実測図 (26-1・26-2は1/6、その他は1/3)



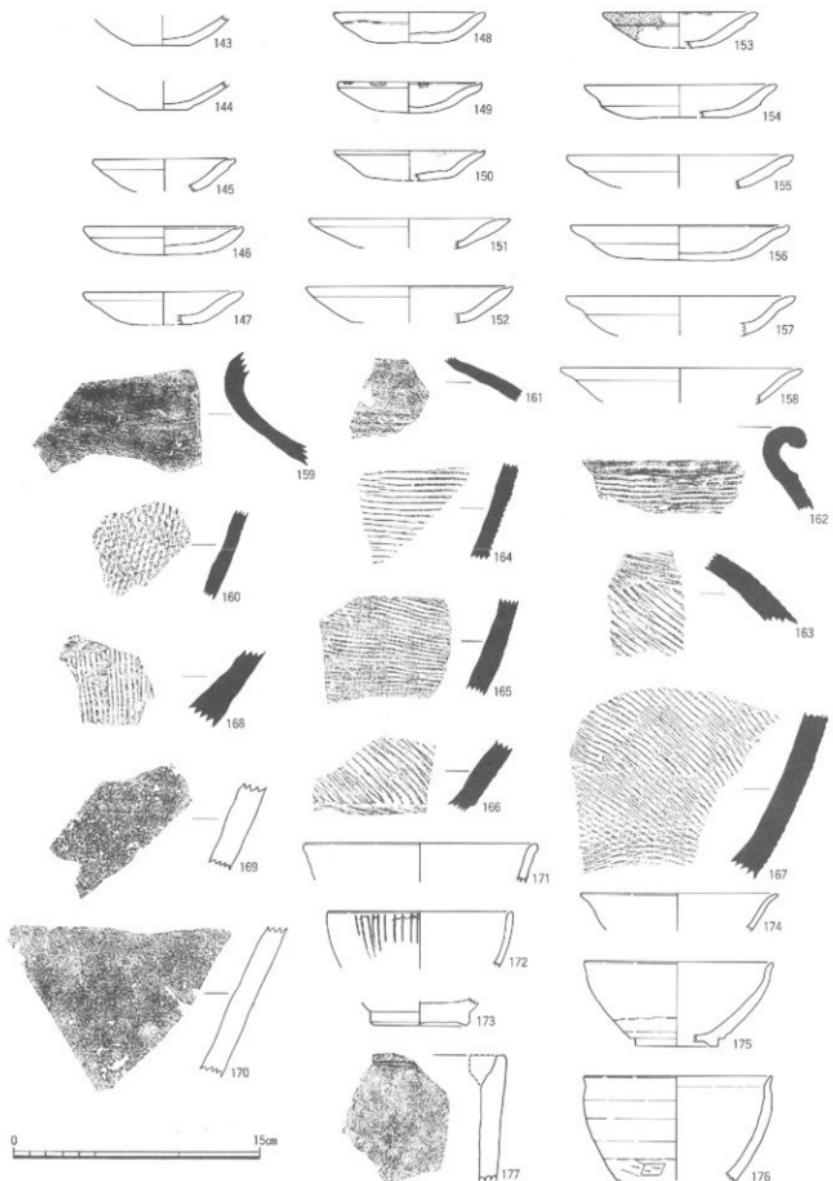
第16図 遺物実測図 (58・59は1/2、その他は1/3)



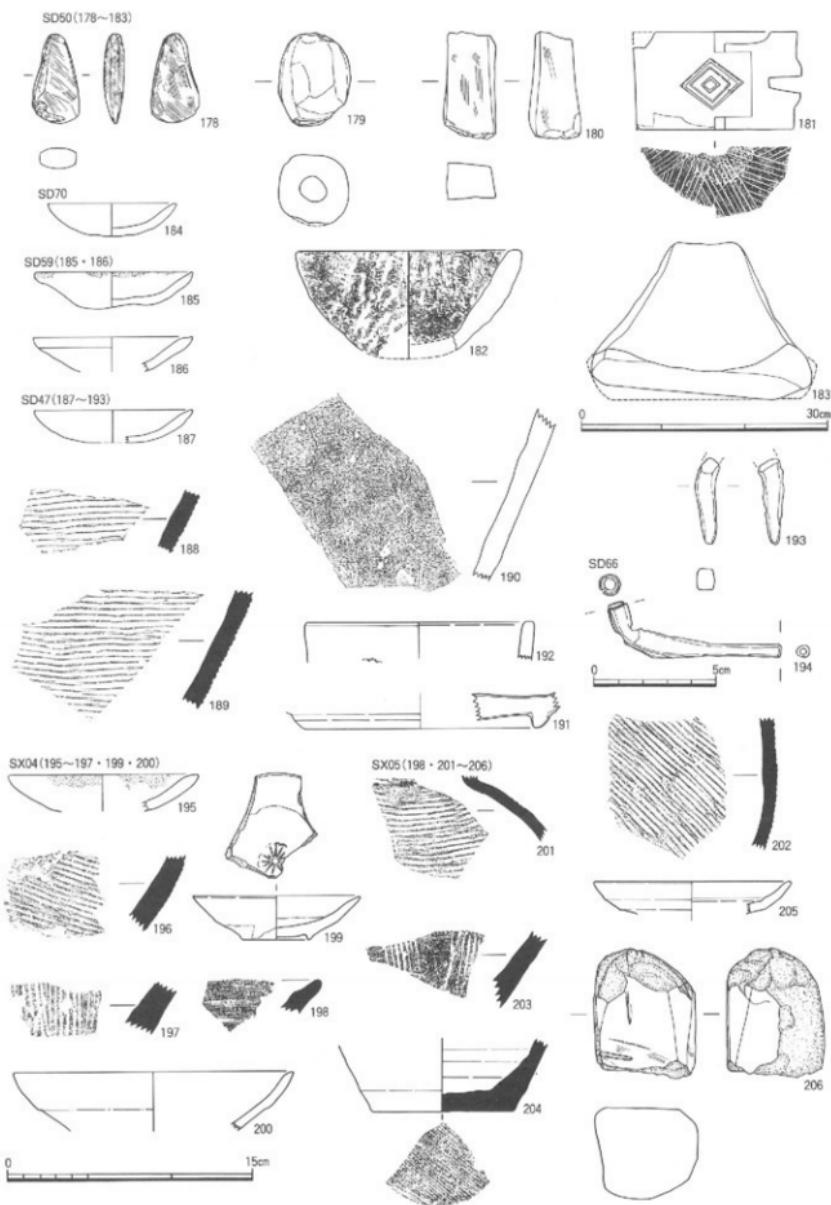
第17図 遺物実測図 (SD49、1 / 3)



第18図 遺物実測図 (SD49 129・138~142は1/2、135・136は1/6、その他は1/3)

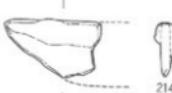
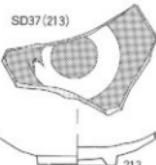
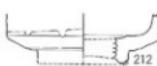
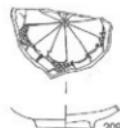
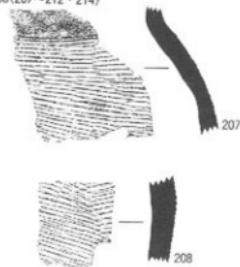


第19図 遺物実測図 (SD50 1/3)

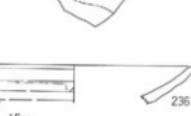
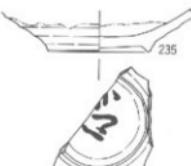
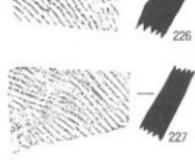
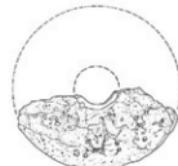
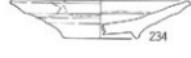
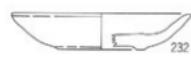
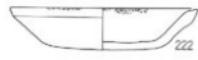
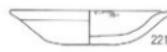
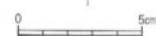


第20図 遺物実測図 (193・194は1/2、181~183は1/6、その他は1/3)

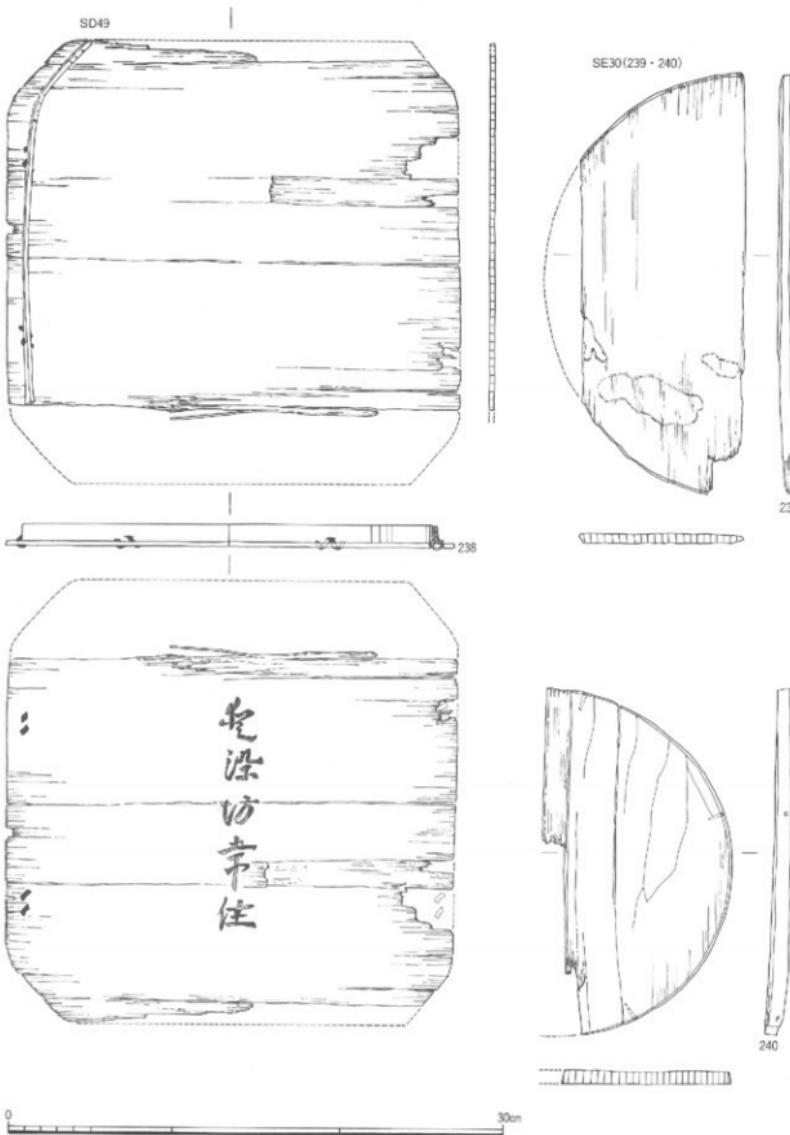
SX06(207~212・214)



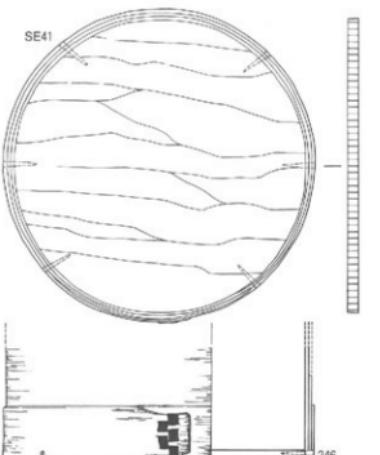
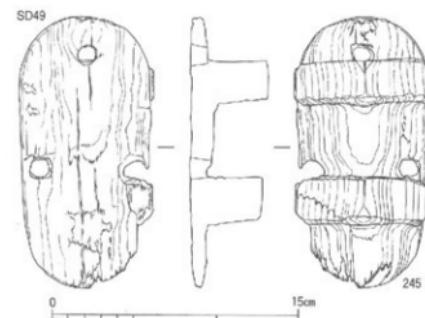
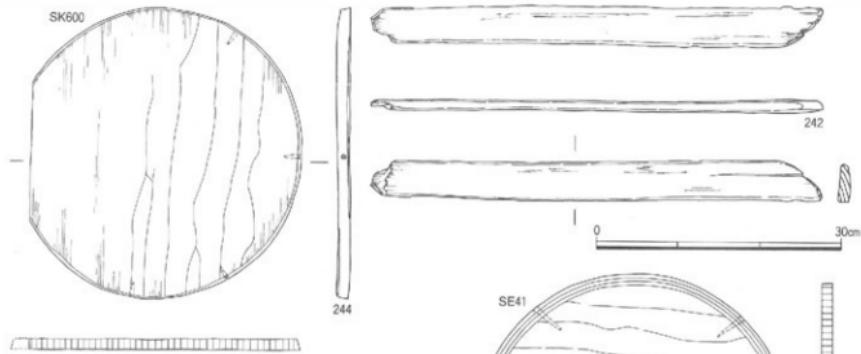
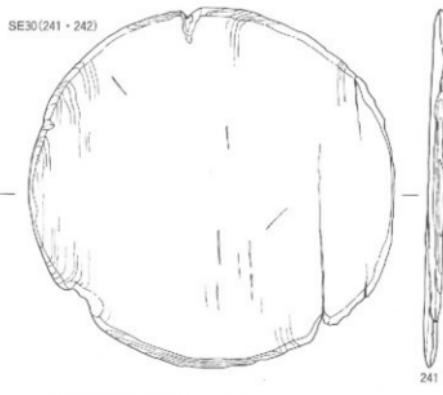
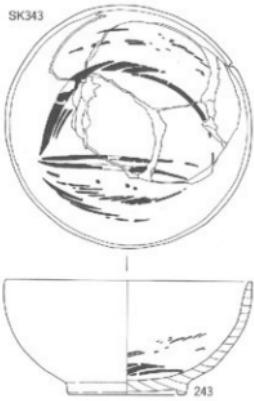
遺構外出土遺物(215~237)



第21図 遺物実測図 (214は1/2、その他は1/3)



第22図 遺物実測図 (S = 1 / 3)



第23図 遺物実測図 (242は1/6、その他は1/3)

IV まとめ

1 遺構と遺物

平成10年度の発掘調査で検出した遺構には、掘立柱建物・柵・溝・井戸・土坑がある。

掘立柱建物は梁行1間×桁行1間が1棟、1間×2間が4棟、1間×3間が1棟の計6棟である。これらの掘立柱建物は次のようにまとめられる。①梁行が1間の側柱建物で、桁行も1間～3間である。②柱間が2.2m～4.2mである。特に建物SB08～SB10の柱間がその他の建物に比べて広く、3m以上ある。③柱穴の直径が80～120cm（SB09）、20～30cm（SB11）、40～60cm（それ以外）である。SB09だけが大きい。④柱穴の形状は円形以外に、円形と梢円を併用している（SB09・SB10）。⑤桁行の柱穴の通りが不揃いである。⑥建物の平面積は12m²～20m²である。⑦SB09・SB10の柱穴から15世紀後半～16世紀前半の土師器皿が出土している。以上の点を、富山県の掘立柱建物の特徴（宮田 1994）に比較して考えてみれば、①・⑤～⑦から、15世紀から16世紀の建物の特徴に合致する。

建物群は大きさはSB04・SB05と、SB08～SB10に分かれる。前者の建物群から検討してみる。SB04とSB05については、切り合いがないので新旧関係は分からず。また柱穴から遺物が出土していないので、所持時期も明確ではない。しかし、それらの建物群を取り囲むように、溝SD41・SD43が巡り、屋敷地の中に建物がセットのような配置をしていて、同時期と考える。それらの溝から17世紀前半の遺物が出土している。また、溝の方向が、後者のSB08～SB10の溝の方向と違っていることからも、建物の所属時期は17世紀前半であろう。また一方、SB08～SB10は近接している。柱穴の切り合いから、SB09はSB10よりも新しいことが分かるが、SB08との新旧関係は不明である。横SA03を伴うSB10は小型柱穴、SB09は大型柱穴であり、小型柱穴から大型柱穴への変遷が見られる。大型柱穴の出現や柱穴内の遺物から、SB09が3棟の建物の中で最後の時期のものと想定できる。また、SB08の柱穴はSB10と同じく小型であり、3棟の建物は同時存在しないことから、SB08が一番古いと考えたい。すなわち、SB08→SB10→SB09へと変化する。桁行は1間から2間に広がっているが、平面積はほとんど変化していないことになる。これらの建物の時期は、SB09の柱穴出土遺物や周辺の出土遺物から15世紀後半～16世紀前半と想定したい。なお、SB11は、後述する屋敷地の中に立地するので、同時期と考えたい。

SB08～SB10の建物を「コ」の字状に囲むように区画溝SD50・SD47が巡っている。その溝で区画された東西の幅は48mである。この区画溝の北端はSD37（旧三ヶ用水）で切られ突き抜けてはいないことから、南北の幅は最大50mで、略正方形の屋敷地であることが分かる。内側にはSD49・SD69が巡り、二重の溝になっている。溝といつても幅約2～5m、深さ約1mもあり、堀と言える。すなわち、堀で区画された屋敷地は、東西に走るSD60で南北に仕切られている。この屋敷地は、南北約40m・東西約26mの規模で、建物空間として利用されている。北側は南北約36m・東西24m以下で、空地になっていたことが分かる。すなわち堀で囲まれた屋敷地の面積は約1,900m²で、建物域が約1,000m²、空地域約870m²以下である。なお、堀に沿って土塁が巡っていたかは不明である。

掘SD49の最終面から「愛染坊常住」と書かれた折敷が出土している。折敷の周辺から煤の付着した完形の土師器皿が数点出土しており、遺物の出土量も他の遺構に比べて多いことから、堀を埋めるときに儀式として使用された遺物が廻棄されたと考える。井戸終焉に伴う土師器皿の廻棄など、呪術に土師器が使われることは言うまでもない（鷹柄1999）ことから、16世紀中頃、堀を埋めるときに、「愛染坊」の持ち物である折敷の上に土師器皿をのせ、堀の水に鎮めたと想像される。ここでは特に、この屋敷地が「愛染坊」という寺院の可能性が大であることに注目したい。「愛染」とは修驗道の崇拝対象にもなっている愛染明王を示すことから、「愛染坊」とは愛染明王から名前をとった寺院と考えられる。しかし、県内では「愛染坊」という寺院名は現存しないし、古記録でも確認できない。また、全国に現存する「愛染院」「愛染寺」の名のつく寺院は23箇所あるが、1例を除いてすべて真言宗の寺で、近隣では新潟

県・石川県・福井県にある（全国寺院大鑑編纂委員会 1991）。となれば、墨書の「愛染坊」とは真言宗関係の寺院と考えられる。ところで、町史によれば、八塚C遺跡の立地する場所の小字は「東寺家」「中寺家」である。周辺には「表熊屋敷」「熊屋敷」の小字名が残っている。さらに、「昔、ここに山伏の住む大きな寺院があった。上杉謙信の兵火で焼失した」という伝承から、この地に熊野信仰の場があり山伏や修驗者の寺が存在したが、戦国時代に焼失・廃絶したことが想定されている（大島町教育委員会 1989）。出土した墨書きから、確認された屋敷地はこの伝承を裏付けるものと考える。屋敷地にある建物が1棟ごとの配置であること、屋敷地が建物空間と空地で構成されていること、堀が全周しておらず一方を開放する配置は、堀で囲む城館機能とは違った寺院の一様相を示しているのであろう。付加すれば、空地の方向風が彼方に、山伏の修行関連の場所でもある二上山が見えることは偶然ではなかろう。

出土した遺物には、縄文時代の土器・石器、古代の土器・陶器、中世の土器・陶磁器・木製品・石製品・金属製品、近世の土器・陶磁器・石製品・金属製品がある。所属時代は、主として15世紀後半～16世紀中頃であるが、17世紀や18世紀のものも目立つ。縄文時代は後晩期、古代は7世紀・9世紀～10世紀である。

中世の土師器皿は主に手づくね製品で、富山県の土師器癡年（宮田 1997）によれば、A類は15世紀、B・C類は15世紀後半～16世紀中頃である。口径は9cm前後のものが多いが、14cmを超える大型製品もある。15世紀後半から北陸に京都系土師器が出現するが、この遺跡出土の土師器は、多くは京都系土師器の在地化した形態である（北陸中世考古学研究会 1999）。15世紀のロクロ土師器皿は少量で、なかには底部を削って京都系土師器に模倣した破片（15世紀後半）もある。

中世の土器・陶磁器の種類別組成（表1）を見れば、土師器が75.5%と高い。土師器の比率が高いのは、館としての性格を示している。次いで、珠洲が16.4%と一定の割合を占めながら、越前3.5%と瀬戸美濃2.5%とそれぞれの比率が低い。中国製陶磁器が1.1%と少量であるが、1点の青花に比べ青磁が中心である。この組成は16世紀後半のそれと比べると、越前・瀬戸美濃・青花が少ない点で違い、16世紀中頃までの様相を示していることが分かる（北陸中世土器研究会 1997）。また同時代の県内居館の組成とほとんど変わりがなく、組成からでは寺院か居館を区別することは難しい。

中世の五輪塔・石鉢に用いられた石材は粗い砂岩である。この石は県西部の氷見海岸周辺の石と考えられる。氷見海岸周辺で産する砂岩は石仏・石塔に多く用いられ、氷見周辺ばかりでなく、県西部にも供給されている。県西部の大島町中野や大門町本江には、氷見の轟石の板石塔婆（南北朝時代）がある。現位置を保っているかは不明であるが、それらは旧西神楽川を使って搬入された可能性がある（西井龍儀氏教示）。当遺跡の五輪塔も旧西神楽川を利用して持ち込まれたのであろうか。

中世では、氷見周辺の石材は県西部を供給地としており、県東部には点的にしか分布しない。反対に、県東部に供給する安山岩質の石材は県西部には点的に分布するのみで、この遺跡からは出土していない。県西部の石材には、氷見周辺の砂岩と福光町の凝灰角礫岩がある。氷見周辺の石は主に石仏・石塔に利用されており、鎌倉時代から16世紀が中心であろう。福光町の桑山石は石質が粗いため、石仏・石塔類は少なく、15～16世紀から石臼など日常生活品が中心で、近世には建物の土台石としても使われる。このように、県西部では、石仏・石塔と石臼の石材が使い分けられ流通していたことが分かる。さらに、石臼の石材から見れば、県西部には凝灰岩、県東部には安山岩・花崗岩に分かれて分布している。そのことは、北陸西部の凝灰岩系世界と北陸東部の安山岩系世界に繋がり、富山県では北陸の東西の様相を映していることが分かる（北陸中世考古学研究会 1999）。また、砥石では、仕上げ砥石としての鳴滝砾が出土していて、全国規模で広域的に流通する石製品の動きもうかがえる。

近世になると、中世の土器・陶磁器の組成が一変する。越中瀬戸・肥前陶磁器で構成され、土師器皿が見られなくなる。出土遺物の時期は17世紀前半と17世紀後半～18世紀に中心がある。陶磁器組成では越中瀬戸の比率が肥前に比

表1 八塚C遺跡の土器・陶磁器組成

平成10年度調査分

中世の土器・陶磁器の器種別組成

| 種類 | 器種 | 破片数 | 全体での% | 器種での% |
|------|----|-----|-------|-------|
| 土師器 | 皿 | 639 | 75.5 | 99.4 |
| | 擂鉢 | 2 | 0.2 | 0.3 |
| | 火舎 | 2 | 0.2 | 0.3 |
| | 小計 | 643 | 76.0 | 100 |
| 珠洲 | 甕 | 95 | 11.2 | 68.3 |
| | 壺 | 19 | 2.2 | 13.7 |
| | 擂鉢 | 25 | 3.0 | 18.0 |
| | 小計 | 139 | 16.4 | 100 |
| 越前 | 甕 | 29 | 3.4 | 96.7 |
| | 擂鉢 | 1 | 0.1 | 3.3 |
| | 小計 | 30 | 3.5 | 100 |
| 瀬戸美濃 | 碗 | 13 | 1.5 | 61.9 |
| | 皿 | 3 | 0.4 | 14.3 |
| | 壺 | 4 | 0.5 | 19.0 |
| | 茶入 | 1 | 0.1 | 4.8 |
| | 小計 | 21 | 2.5 | 100 |
| 青磁 | 皿 | 1 | 0.1 | 12.5 |
| | 碗 | 6 | 0.7 | 75.0 |
| | 盤 | 1 | 0.1 | 12.5 |
| | 小計 | 8 | 0.8 | 100 |
| 白磁 | 碗 | 2 | 0.2 | 50.0 |
| | 皿 | 1 | 0.1 | 25.0 |
| | 杯 | 1 | 0.1 | 25.0 |
| | 小計 | 4 | 0.2 | 100 |
| 青花 | 皿 | 1 | 0.1 | 100 |
| | 小計 | 1 | 0.1 | 100 |
| | 総計 | 846 | 100 | |

近世の土器・陶磁器の器種別組成

| 種類 | 器種 | 破片数 | 全体での% | 器種での% |
|------|----|-----|-------|-------|
| 越中瀬戸 | 皿 | 32 | 57.1 | 80.0 |
| | 向付 | 2 | 3.6 | 5.0 |
| | 碗 | 3 | 5.4 | 7.5 |
| | 天目 | 1 | 1.8 | 2.5 |
| | 擂鉢 | 1 | 1.8 | 2.5 |
| | 香炉 | 1 | 1.8 | 2.5 |
| | 小計 | 40 | 71.4 | 100 |
| 肥前陶器 | 皿 | 5 | 8.9 | 55.6 |
| | 碗 | 2 | 3.6 | 22.2 |
| | 壺 | 2 | 3.6 | 22.2 |
| | 小計 | 9 | 16.1 | 100 |
| 肥前磁器 | 皿 | 4 | 7.1 | 57.1 |
| | 碗 | 3 | 5.4 | 42.9 |
| | 小計 | 7 | 12.5 | 100 |
| 総計 | | 56 | 100 | |

平成9年度調査分

中世の土器・陶磁器の器種別組成

| 種類 | 器種 | 破片数 | 全体での% | 器種での% |
|------|----|-----|-------|-------|
| 土師器 | 皿 | 44 | 71.0 | 100.0 |
| | 小計 | 44 | 71.0 | 100 |
| 珠洲 | 甕 | 6 | 9.7 | 66.7 |
| | 壺 | 2 | 3.2 | 22.2 |
| 擂鉢 | 擂鉢 | 1 | 1.6 | 11.1 |
| | 小計 | 9 | 14.5 | 100 |
| 越前 | 甕 | 4 | 6.5 | 80.0 |
| | 擂鉢 | 1 | 1.6 | 20.0 |
| 小計 | | 5 | 8.1 | 100 |
| 瀬戸美濃 | 碗 | 1 | 1.6 | 50.0 |
| | 皿 | 1 | 1.6 | 50.0 |
| | 小計 | 2 | 3.2 | 100 |
| 青磁 | 碗 | 1 | 1.6 | 100.0 |
| | 小計 | 1 | 1.6 | 100 |
| 瓦質土器 | 火鉢 | 1 | 1.6 | 100.0 |
| | 小計 | 1 | 1.6 | 100 |
| 総計 | | 62 | 100 | |

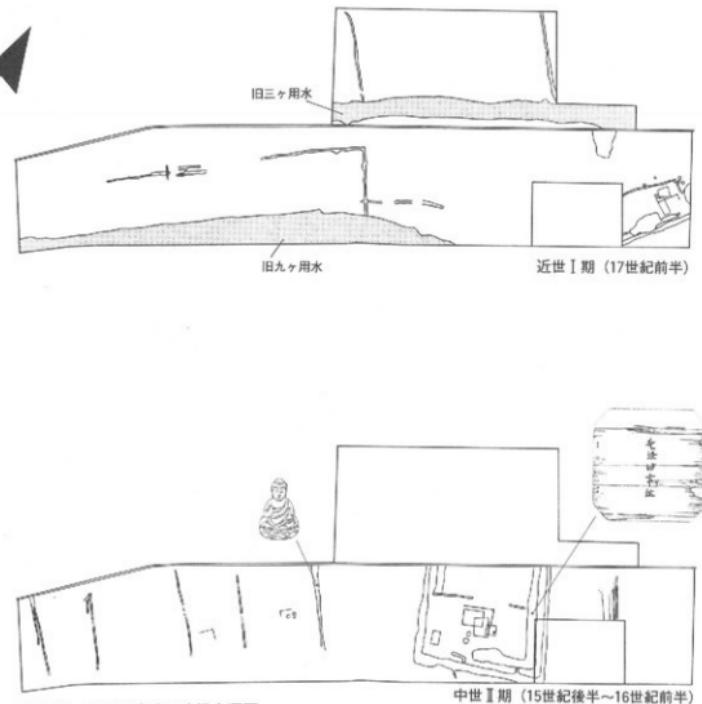
近世の土器・陶磁器の器種別組成

| 種類 | 器種 | 破片数 | 全体での% | 器種での% |
|------|----|-----|-------|-------|
| 越中瀬戸 | 皿 | 6 | 66.7 | 85.7 |
| | 碗 | 1 | 11.1 | 14.3 |
| | 小計 | 7 | 77.8 | 100 |
| 肥前陶器 | 皿 | 1 | 11.1 | 100.0 |
| | 小計 | 1 | 11.1 | 100 |
| 肥前磁器 | 皿 | 1 | 11.1 | 100.0 |
| | 小計 | 1 | 11.1 | 100 |
| 総計 | | 9 | 100 | |

べて71.7%と高い。県内の近世遺跡で越中瀬戸の比率が高いのは、窯周辺の地域、越中瀬戸の集積地、内陸部の農村などであることから（宮田 1999）、近世の当遺跡は内陸部の農村の様相を示しているのであろう。

2 全体のまとめ

平成9・10年度の2ヶ年にわたる調査成果から、遺跡の推移を簡単にまとめてみる。出土土器から中世Ⅰ期（14世紀～15世紀前半）、中世Ⅱ期（15世紀後半～16世紀中頃）、近世Ⅰ期（17世紀前半）、近世Ⅱ期（17世紀後半～18世紀）の4時期に大きく区分できる。縄文時代と古代の遺構は、調査区では検出できない。中世の14世紀後半～15世紀前半になって、遺構が出現すると考えられる。遺構を明確に示し得ないが、調査区の西側に遺構が点在すると推測する。中世Ⅱ期になると、堀を巡る屋敷地を中心、細い溝で区画された長方形の屋敷地が東西に広がる。中世後期には、道に面して屋敷地が作られていることが多いことから、調査区の屋敷地もそのように作られていることが想定できる。調査区の北側は自然の崖地になっていることから、水田が広がっていたことが考えられる。町史に記載されている地籍図によれば、調査区の南側には道が確認できる。また「昔、放生津の守護館から増山城へ通じる近道があった」という伝承も当地に残っている（大島町教育委員会 1989）。そのことから、調査区の南側に道が想定され、その道に



第24図 八塚C遺跡の遺構変遷図

表2 八塚C遺跡出土の銭貨一覧

| 番号 | 銭貨名 | 国名 | 初鋳年代 | 書体 | 銭径(cm) | 内径(cm) | 内孔(cm) | 銭厚(cm) | 量目(g) | 備考 |
|----|------|----|------|----|--------|--------|--------|--------|-------|--------------------------|
| 1 | 開元通寶 | 唐 | 621 | 篆書 | 24.70 | 19.70 | 6.43 | 1.28 | 3.74 | |
| 2 | 乾元重寶 | 唐 | 758 | 楷書 | 24.19 | 21.20 | 6.40 | 1.27 | 3.18 | 縁が狭い、当十銭 |
| 3 | 宋通元寶 | 北宋 | 960 | 真書 | 24.52 | 18.50 | 6.05 | 1.16 | 3.43 | |
| 4 | 太平通寶 | 北宋 | 976 | 真書 | 24.17 | 18.48 | 6.30 | 0.96 | 2.77 | 鋸のため背文字不明 |
| 5 | 淳化元寶 | 北宋 | 990 | 行書 | 24.21 | 18.45 | 5.85 | 1.18 | 3.49 | |
| 6 | 淳化元寶 | 北宋 | 990 | 真書 | 24.08 | 17.73 | 5.93 | 1.36 | 3.55 | |
| 7 | 至道元寶 | 北宋 | 995 | 行書 | 24.31 | 17.18 | 6.18 | 1.37 | 3.62 | |
| 8 | 至道元寶 | 北宋 | 995 | 草書 | 24.37 | 17.40 | 6.15 | 1.07 | 2.69 | |
| 9 | 至道元寶 | 北宋 | 995 | 真書 | 24.77 | 18.40 | 6.13 | 1.21 | 3.21 | |
| 10 | 咸平元寶 | 北宋 | 998 | 真書 | 24.66 | 18.15 | 6.10 | 1.14 | 3.04 | |
| 11 | 景德元寶 | 北宋 | 1004 | 真書 | 24.94 | 20.33 | 6.43 | 1.17 | 3.50 | |
| 12 | 祥符通寶 | 北宋 | 1008 | 真書 | 24.64 | 19.05 | 6.00 | 1.51 | 3.97 | |
| 13 | 祥符元寶 | 北宋 | 1008 | 真書 | 24.35 | 19.43 | 6.45 | 1.07 | 2.91 | |
| 14 | 祥符元寶 | 北宋 | 1008 | 真書 | 25.19 | 18.40 | 5.78 | 1.41 | 3.79 | 鋸が激しい |
| 15 | 天聖元寶 | 北宋 | 1023 | 真書 | 24.84 | 21.13 | 7.30 | 1.07 | 2.81 | |
| 16 | 大聖元寶 | 北宋 | 1023 | 篆書 | 24.63 | 20.50 | 6.93 | 1.24 | 3.46 | |
| 17 | 天聖元寶 | 北宋 | 1023 | 真書 | 24.72 | 20.20 | 7.13 | 1.13 | 3.11 | |
| 18 | 天聖元寶 | 北宋 | 1023 | 真書 | 24.71 | 20.38 | 6.98 | 1.38 | 3.50 | |
| 19 | 皇宋通寶 | 北宋 | 1038 | 真書 | 24.28 | 19.32 | 6.53 | 1.45 | 4.14 | 鋸が激しい |
| 20 | 皇宋通寶 | 北宋 | 1038 | 真書 | 24.64 | 19.30 | 7.22 | 1.18 | 3.01 | |
| 21 | 皇宋通寶 | 北宋 | 1038 | 真書 | 24.68 | 19.03 | 6.88 | 1.22 | 3.23 | 内郭の穴が45度ずれ |
| 22 | 皇宋通寶 | 北宋 | 1038 | 篆書 | 24.54 | 20.30 | 7.10 | 1.17 | 2.95 | |
| 23 | 皇宋通寶 | 北宋 | 1038 | 篆書 | 23.97 | 19.85 | 7.13 | 1.01 | 2.93 | 判読や不明確 |
| 24 | 皇宋通寶 | 北宋 | 1038 | 篆書 | 24.51 | 19.70 | 7.28 | 1.09 | 3.17 | |
| 25 | 皇宋通寶 | 北宋 | 1038 | 真書 | 24.35 | 18.15 | 6.70 | 1.16 | 2.87 | 下に「宋」の文字だけ確認 |
| 26 | 皇宋通寶 | 北宋 | 1038 | 篆書 | 23.80 | 19.05 | 6.93 | 1.23 | 2.98 | |
| 27 | 至和元寶 | 北宋 | 1054 | 篆書 | 23.29 | 19.20 | 6.50 | 1.37 | 3.26 | |
| 28 | 至和元寶 | 北宋 | 1054 | 篆書 | 23.05 | 19.25 | 6.50 | 1.43 | 3.05 | 内郭の穴が45度ずれ |
| 29 | 治平通寶 | 北宋 | 1064 | 真書 | 24.19 | 19.25 | 7.05 | 1.01 | 2.64 | |
| 30 | 熙寧元寶 | 北宋 | 1068 | 真書 | 24.26 | 20.35 | 6.70 | 1.07 | 3.18 | |
| 31 | 熙寧元寶 | 北宋 | 1068 | 篆書 | 24.54 | 20.40 | 6.65 | 1.06 | 3.29 | 内郭の穴が45度ずれ |
| 32 | 熙寧元寶 | 北宋 | 1068 | 篆書 | 23.64 | 18.33 | 6.05 | 1.30 | 3.24 | 内郭の穴が45度ずれ |
| 33 | 熙寧元寶 | 北宋 | 1068 | 篆書 | 23.68 | 18.00 | 7.28 | 1.32 | 3.27 | 内郭の穴が45度ずれ |
| 34 | 熙寧元寶 | 北宋 | 1068 | 真書 | 24.05 | 18.30 | 6.10 | 1.46 | 3.52 | 鋸が激しい |
| 35 | 熙寧元寶 | 北宋 | 1068 | 篆書 | 23.46 | 18.48 | 6.60 | 1.28 | 3.21 | |
| 36 | 元豐通寶 | 北宋 | 1078 | 行書 | 24.44 | 19.05 | 7.00 | 1.16 | 2.75 | |
| 37 | 元豐通寶 | 北宋 | 1078 | 行書 | 23.89 | 18.55 | 6.75 | 1.47 | 3.73 | |
| 38 | 元豐通寶 | 北宋 | 1078 | 篆書 | 24.24 | 18.18 | 6.50 | 1.26 | 3.15 | |
| 39 | 元豐通寶 | 北宋 | 1078 | 行書 | 24.78 | 18.40 | 6.60 | 1.32 | 3.56 | 鋸が激しい |
| 40 | 元豐通寶 | 北宋 | 1078 | 行書 | 23.89 | 18.30 | 6.10 | 1.18 | 3.46 | |
| 41 | 元祐通寶 | 北宋 | 1086 | 篆書 | 24.14 | 19.60 | 7.13 | 1.41 | 3.12 | |
| 42 | 元祐通寶 | 北宋 | 1086 | 行書 | 24.76 | 20.45 | 6.55 | 1.32 | 3.88 | |
| 43 | 聖宋元寶 | 北宋 | 1101 | 篆書 | 23.37 | 19.40 | 6.50 | 1.37 | 3.56 | 判読や不明確 |
| 44 | 聖宋元寶 | 北宋 | 1101 | 篆書 | 24.06 | 18.68 | 5.98 | 1.26 | 3.02 | |
| 45 | 聖宋元寶 | 北宋 | 1101 | 行書 | 24.33 | 19.80 | 6.60 | 1.49 | 4.27 | |
| 46 | 大觀通寶 | 北宋 | 1107 | 真書 | 23.92 | 20.75 | 6.33 | 1.07 | 2.76 | |
| 47 | 政和通寶 | 北宋 | 1111 | 分階 | 24.07 | 20.65 | 6.38 | 1.24 | 3.10 | |
| 48 | 政和通寶 | 北宋 | 1111 | 篆書 | 23.74 | 21.25 | 6.53 | 1.06 | 3.21 | |
| 49 | 政和通寶 | 北宋 | 1111 | 篆書 | 23.66 | 20.08 | 6.25 | 1.12 | 2.30 | |
| 50 | 政和通寶 | 北宋 | 1111 | 分階 | 24.34 | 20.58 | 6.25 | 1.34 | 3.79 | 鋸がほとんどない |
| 51 | 紹熙元寶 | 南宋 | 1190 | 真書 | 23.59 | 18.55 | 6.25 | 1.21 | 2.84 | 鋸がほとんどなく背に「四」あり |
| 52 | 嘉泰通寶 | 南宋 | 1201 | 真書 | 24.15 | 20.00 | 7.05 | 0.97 | 2.84 | 背に「二」あり |
| 53 | 永樂通寶 | 明 | 1408 | 真書 | 24.89 | 20.93 | 5.75 | 1.24 | 2.94 | |
| 54 | 寛永通寶 | 江戸 | 1697 | 背元 | 23.36 | 16.90 | 5.35 | 1.12 | 2.43 | 鋸びでていなく、その他の一括品とは保存状況が違う |

面して屋敷地が広がっていたことが分かる。「愛染坊」と想定できる屋敷地には掘立柱建物と井戸がある。この建物は生活場所とともに、寺院としても機能していたのであろう。

この屋敷地の西側にある溝から、平成9年度の調査で懸仏が出土している。この溝は屋敷地の北側に巡ると想定される。また、屋敷地の南西方向にあたり、今回の調査区に隣接した所で中国銭が約1貫目出土している。これは昭和初期のことと、開元通寶から永楽通寶までの銭貨が残っている（表2）。中世の一括出上銭は、貯蓄でなく埋納行為を示すといわれている（東北中世考古学会 1999）ことから、この一括銭は懸仏と同じく「寺院」の廃絶と共に埋置されたと想像できる。なお、調査区からフイゴの羽口が出土していることから、東西に広がっている屋敷地の遺物でも鍛冶が行われていたことが推測できる。

近世I期の17世紀前半になると、調査区の東側に小さな屋敷地が作られ、建物の周辺には水田が広がっていたと考えられる。中世の屋敷群が廃絶した後、近世の散村的な農村景観を示すようになる。17世紀後半から18世紀になると調査区には建物がなくなり、北側では三ヶ用水、南では九ヶ用水だけになり、周辺の水田に水を供給している。なお、それらの用水は古文書によれば、17世紀後半に開削されている。

（宮田・島田・大友）

（1） 出土銭貨は地元の棚元理一氏が保管している。その銭貨には、中国銭以外と近世の新寛永通寶が一枚含まれている。しかし、この銭貨は他の銭貨と違ってさびていないことから、一括出土したものではない可能性がある。

引用・参考文献

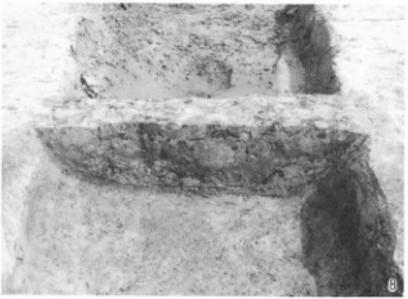
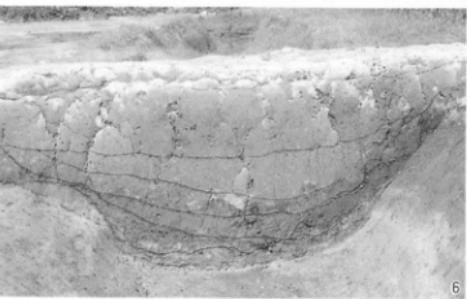
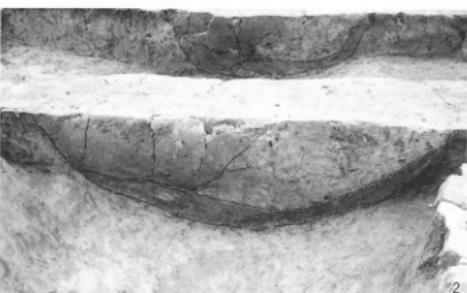
- オ 大島町教育委員会 1989 『大島町史』 大島町
大島町教育委員会 1991 『富山県 大島町荒畠遺跡 発掘調査概要』
大島町教育委員会 1998 『八塚C遺跡－民間分譲宅地造成事業に伴う発掘調査報告－』
大橋康一 1989 『肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社
ス 鶴柄俊夫 1999 『中世村落と地域性の考古学的研究』 大巧社
セ 全国寺院大鑑編纂委員会 1991 『市町村区分による全国寺院大鑑』 法藏館
ト 東北中世考古学会 1999 『東北の出土銭貨』
ナ 永井久美男 1996 『日本出土銭総覧（1996年版）』 兵庫埋蔵銭調査会
ニ 西村 涉 1994 『曲物の細部技法』『文化財論集』 文化財論集刊行会
ホ 北陸中世考古学研究会 1999 『中世北陸の石文化I』
北陸中世上器研究会 1997 『中・近世の北陸』 桂書房
ヒ 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1996 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V』
フ 藤沢良祐 1994 『瀬戸市史 陶磁器編4』 瀬戸市
藤沢良祐 1996 『瀬戸市史 陶磁器編6』 瀬戸市
姫中町教育委員会 1993 『小倉中稻遺跡発掘調査報告』
姫中町教育委員会 1994 『小倉中稻遺跡発掘調査報告（2）』
ミ 宮田進一 1994 『掘立柱建物』『梅原湖摩壹遺跡発掘調査報告（遺構編）』富山県文化振興財団
宮田進一 1997 『越中国における土師器の編年』『中・近世の北陸』 桂書房
宮田進一 1999 『越中瀬戸の成立と展開』『情報と物流の日本史』 雄山閣
ヨ 吉岡康暢 1996 『中世須恵器の研究』 古川弘文館
四柳嘉章 1997 『北陸の漆器考古学』『北陸の漆器考古学』 北陸中世土器研究会



1. 調査区全景（D地区北側：南東より） 2. SB04・SB05・SA01（南西より）



1. 調査区全景（D地区南側：上空より） 2. SB08・SB09・SB10・SA03（北東より）



1. SD47 A-A' 2. SD47 B-B' 3. SD49 A-A' 4. SD49 B-B' 5. SD49 C-C' 6. SD50 C-C' 7. SD62 A-A'
8. SD62 B-B'

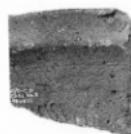


1. SD68 2. SD69 3. SD70 B-B' 4. SD70 A-A' 5. SD35 F-F' 6. SD35 H-H' 7. SE33 8. SE34





39



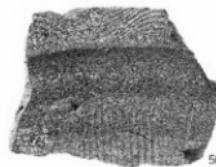
54



49



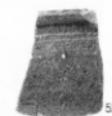
38



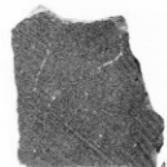
50



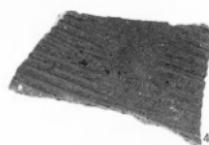
48



52



43



44



53



56



57



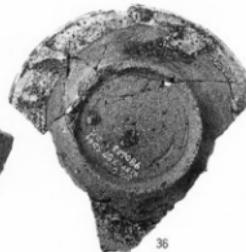
55



33



34



36



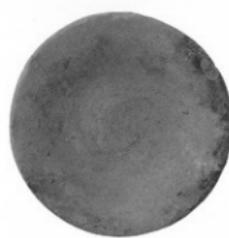
67



82



87



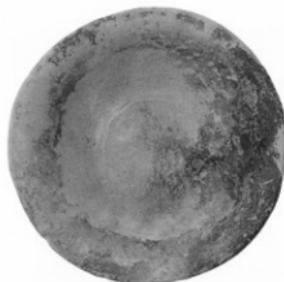
69



76



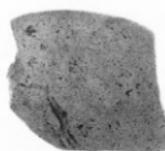
91



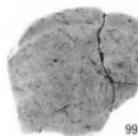
83



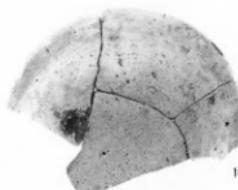
110



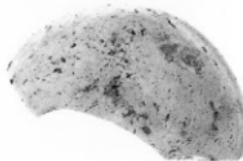
98



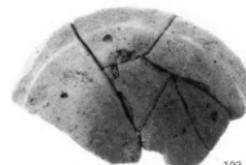
99



100



84



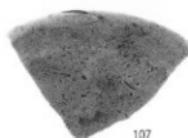
103



108



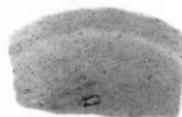
97



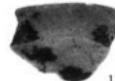
107



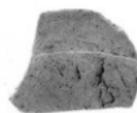
106



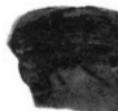
111



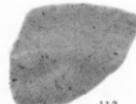
114



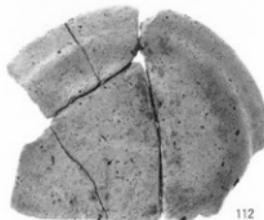
115



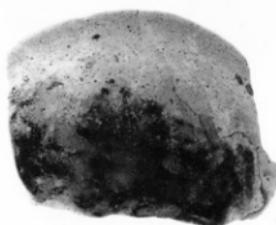
116



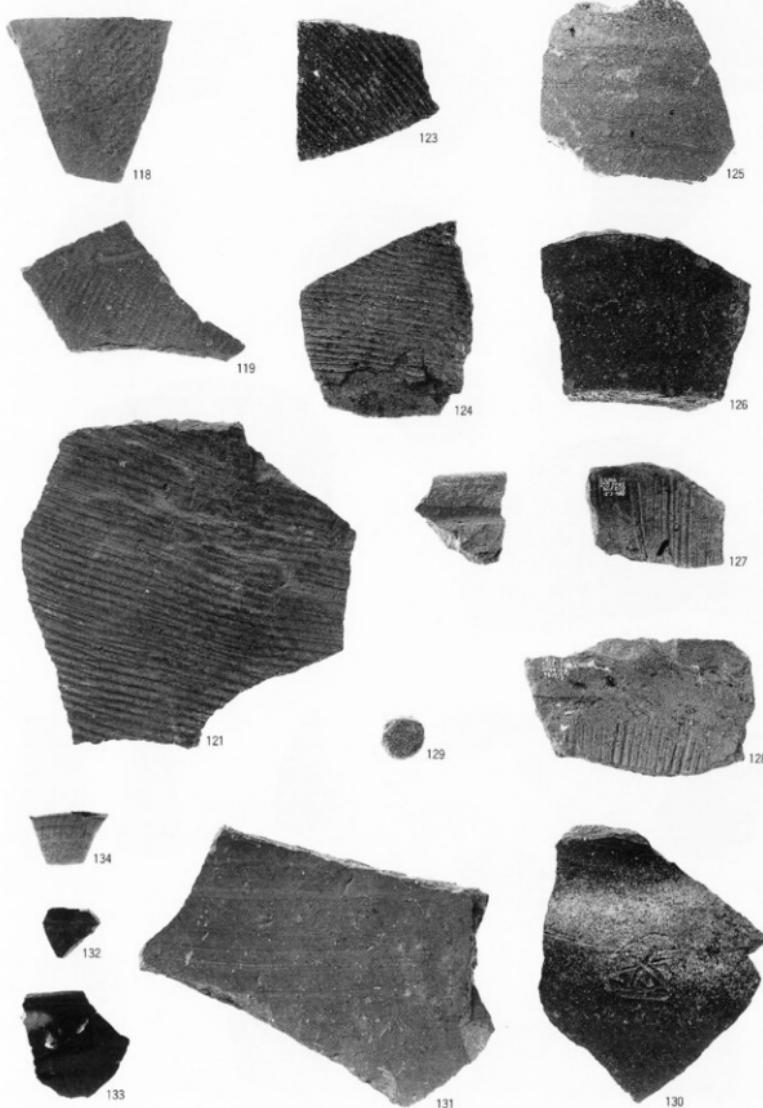
113

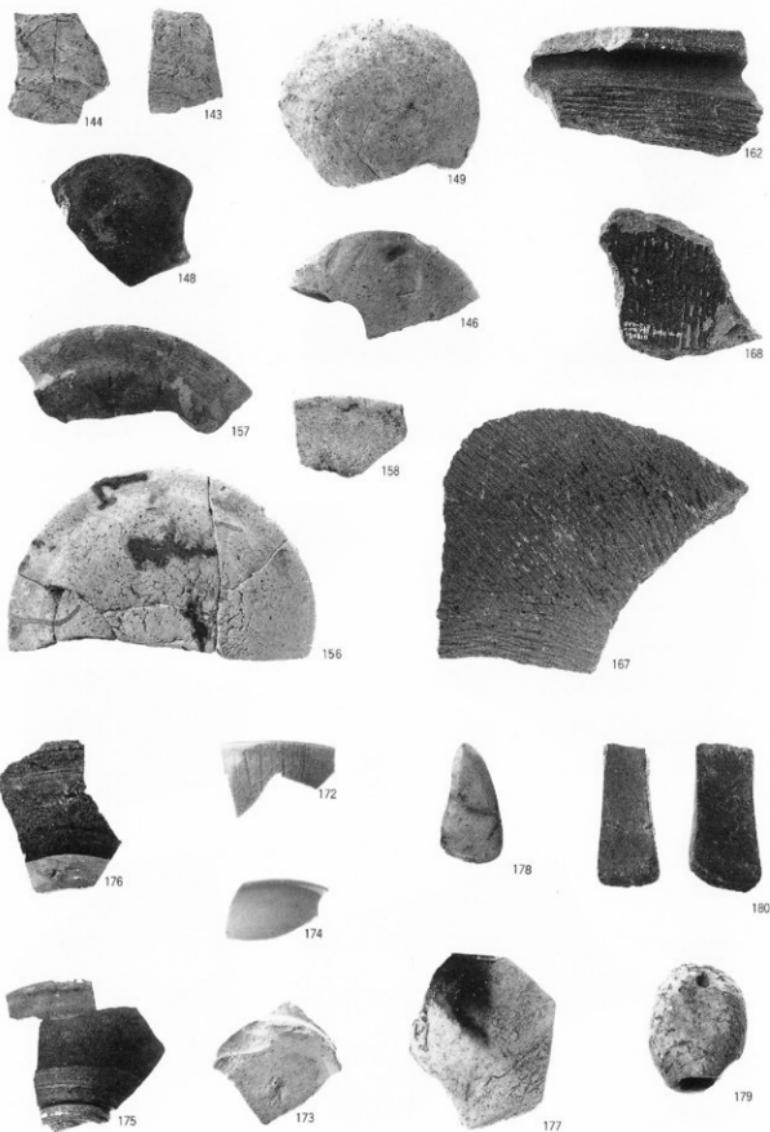


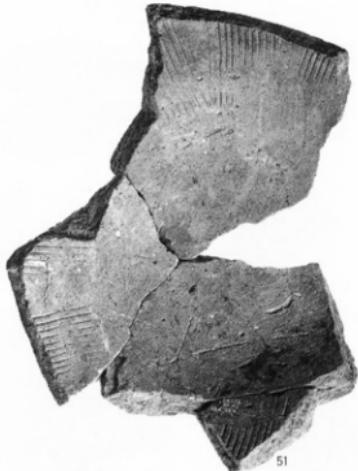
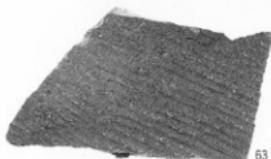
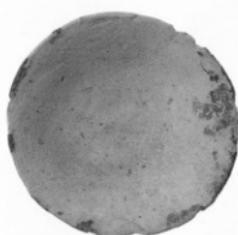
112



117





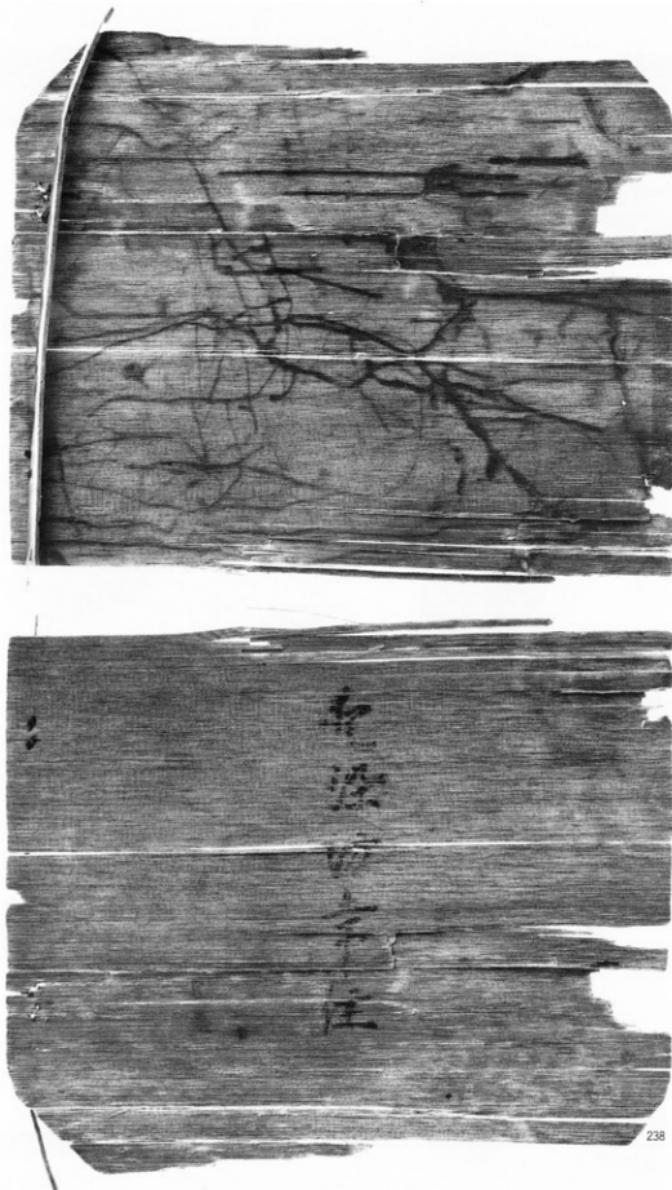




SX06、遺構外出土遺物（1/2）

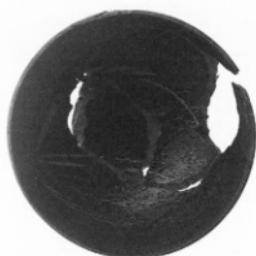


SX04・05・06、金属製品 SD35・49・50、SX06 (1 / 2)

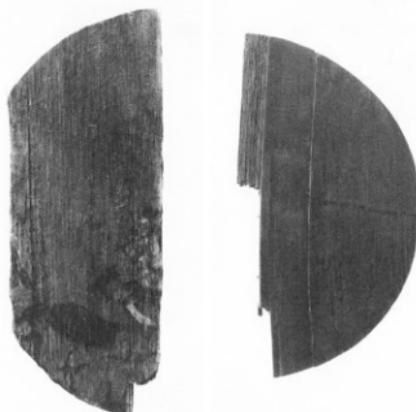




245



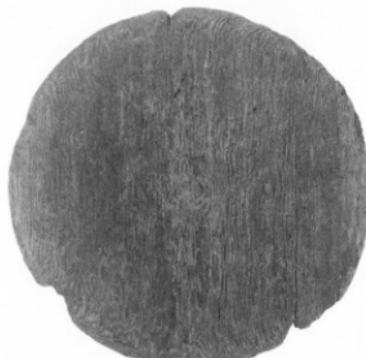
243



239



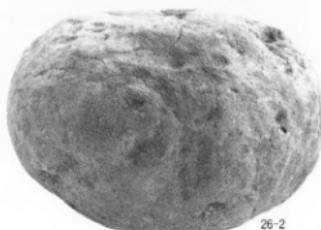
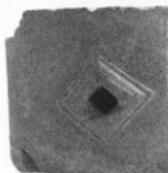
244



241



242



石製品 SD44・46・49・50、SE42、SX05 (135・181: 1/4、26・27・183: 1/5、その他: 1/3)

報告書抄録

| | | | | | | | |
|-------|--|--------------|---------------------|----------------------------------|--|----------------------|-----------------------|
| ふりがな | やつづかCいせき | | | | | | |
| 書名 | 八塚C遺跡 | | | | | | |
| 副書名 | 民間分譲宅地造成事業に伴う発掘調査報告(2) | | | | | | |
| 編著者名 | 宮田進一・島田修一・田中 明・大友喜代子 | | | | | | |
| 編集機関 | 富山県埋蔵文化財センター・大島町教育委員会 | | | | | | |
| 所在地 | 〒930-0115 富山県富山市茶屋町206-3 TEL. 076-434-2814 〒939-0292 富山県射水郡大島町小島703 TEL. 0766-52-3854 | | | | | | |
| 発行機関 | 大島町教育委員会 | | | | | | |
| 所在地 | 〒939-0292 富山県射水郡大島町小島703 TEL. 0766-52-3854 | | | | | | |
| 発行年月日 | 2000年3月31日 | | | | | | |
| ふりがな | ふりがな | コード | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | °' " | °' " | m ² | |
| 八塚C遺跡 | 富山県射水郡 大島町八塚 | 16384 | 016 | 36° 30' 59' 10" | 136° 10" 59' 10" | 19980422 19981106 | 民間分譲宅地造成事業に 伴う事前調査 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な時代 | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 八塚C遺跡 | 集落 | 縄文時代 | | 繩文土器 | 昭和初期の削土により、 擾乱が著しいものの、掘 立柱建物群を囲む大規模 な区画溝が検出された。 | | |
| | | 弥生～古墳時代 | | 高杯 | | | |
| | | 古代 | | 土師器・須恵器 | | | |
| | | 中世 (室町時代) | 掘立柱建物・土坑 井戸・溝・用水 | 中世土師器・珠洲・越前 青磁・瓦器・木製品、 石製品 | | | |
| | | 近世 | 溝・用水 | 越中瀬戸・肥前陶磁 | | | |

富山県大島町

八塚C遺跡

— 民間分譲宅地造成事業に伴う発掘調査報告(2) —

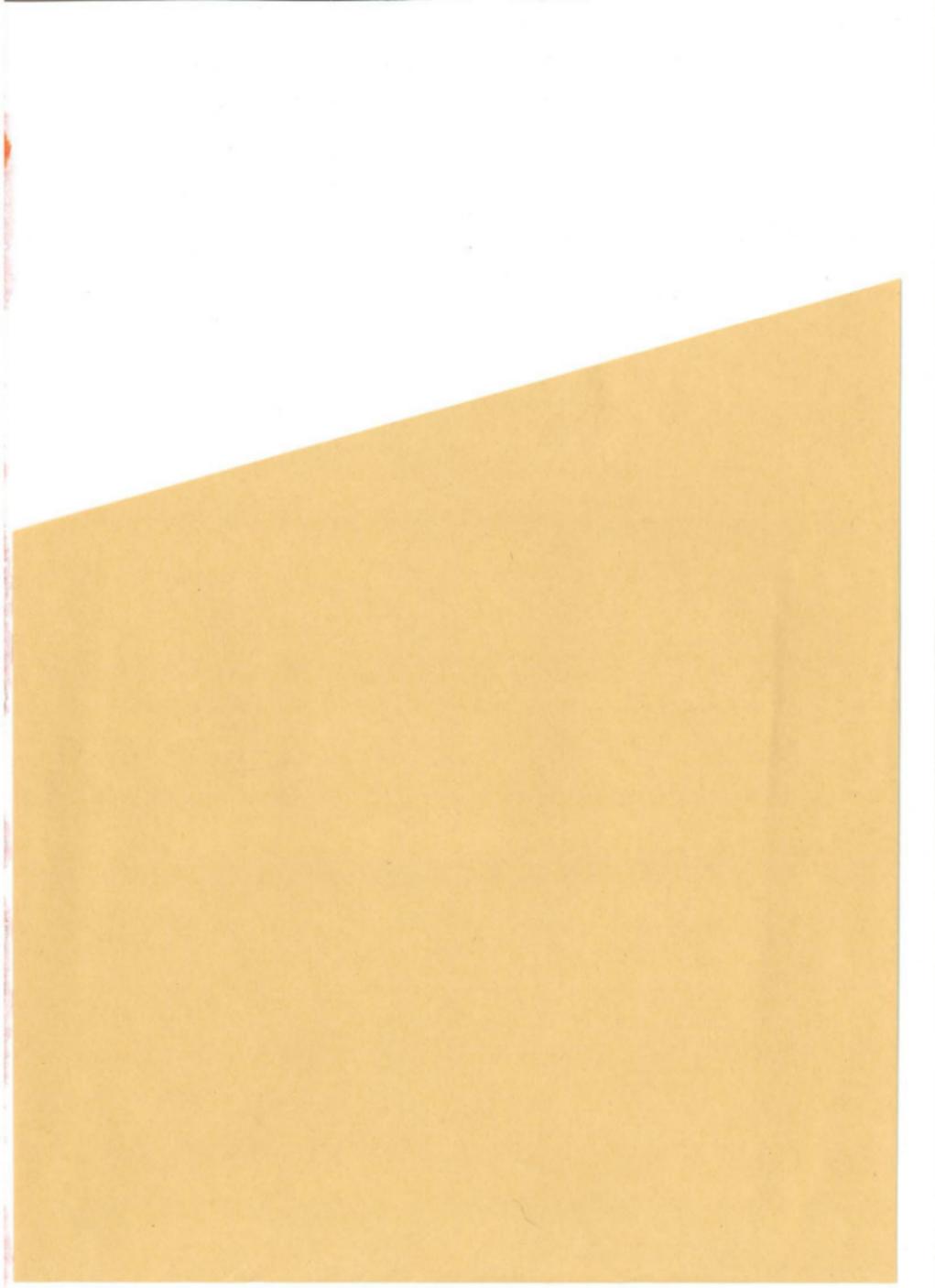
平成12年3月31日発行

編集 富山県埋蔵文化財センター

大島町教育委員会

発行 大島町教育委員会

印刷所 有限会社 オダケ印刷社



付図 八塚C遺跡 遺構全体図 (1 /400)



